〝ミュンヘン〟への道

　ミュンヘン・オリンピックにつながる来春の世界選手権開幕まであと5ケ月を残すだけになった

　日本協会では第3次候補選手21名をすでに発表し、代表決定への最終段階に入り、強化対策委員会の動きもいっそう活気をましている。

　世界選手権の代表を選ぶのに第三次まで候補をつみ重ねて来たのは斯界では初めてのことであり、慎重・厳選いずれともいえ結構な話だと思う。

　今までのようなインスタントな全日本編成では〝世界の壁〟はとうてい突き破ることはできず、周到な準備とコーチングスタッフの責任体制が確立されてこそ成果が期待できるわけであろう。

　ところで、ヨーロッパ遠征選手団によれば、ヨーロッパ各国のナショナルチームの選手層の厚さは聞きしにまさるものがある、という。

　各国とも例外なく40～50名のナショナルプレイヤーを常に用意し、試合相手によってメンバーを多彩に使い分けるようだ。

　遠征した全日本が、ルーマニアBとの第1戦に勝つと、第2戦では2～3人の新メンバーを加えて来たそうでその試合にも全日本が勝つと、タシマイダン杯(通算第3戦)の時にはさらにメンバーが変っていたという。しかもルーマニアはタシマイダン杯とほとんど同時期にマドリッドで開かれたスペイントーナメントに別のナショナルチームを送りこんでいるのだ。

　一チーム分の全日本を編成するのがやっとという斯界の実情と比ぶべくもないがやはりこうしたシステムは一日も早く採りいれるべきであろう。

　村田強化対策委員長は『全日本Aがヨーロッパに遠征している時、Bは日本で外国チームと国際試合、ジュニアを主力のCは韓国に遠征中……』というのが夢だと話してくれた。

　現状ではこれは文字通り夢で正気の発言かとまで云われかねないが、せめて全日本と全日本ジュニアの編成まではこぎつけるべきではなかろうか。

　卒直に云って現在のナショナルチームのうちミュンヘン・オリンピックに戦力として残り得るのは半数であろう。主力となるべきは現在の大学生であり高校の上級生なのだ。将来性のある精鋭を集めて「次代の全日本」が早い時期に組織化されるよう希望したい。（杉山）

時　評

　9月21日東京で開かれた全国理事会席上、田村会長から「評議員の代理資格緩和」に関する提案が出された。

　10月末の全国評議員会で承認のうえ、規約が変更されることになるが、この決定は、今後の日本協会運営にかなり大きな影響を及ぼすのではないかと思はれる。

　これまで評議員の代理資格は組織・加盟団体の副会長に限られていた。

　しかし、毎年2回（2月定例10月臨時）開かれる評議員会に副会長が代理出席する例は少なく、ほとんど委任状というのが実情。実際に顔を揃えるのは10人足らずで、斯界の最高機関と呼ぶにはあまりにも低調だった

　田村会長は、会長就任以前からこの点の善処を強く要望していたもので、今回の提案は懸案の実現といってもよい。

　ところで、新規約によって代理資格は各組織・加盟団体の理事長またはこれに代わる者と大巾に緩和されるわけだが、評議員はあくまで各組織・加盟団体の会長であることを忘れてはならない。

　一部に、今回の緩和は評議員会の〝重み〟を失うものだという声が聞かれるのも、そうした心配があるからだろう。

　代理を立てられるのは評議員がやむを得ぬ事情のある場合に限られ、初めから代理者が出るのではないことを自覚すべきだ。

　代理者に日本協会役員をあてることはできないという現行規約（第15条の2）は当然のことながら活かされるから副会長以下の代理者を送る場合、組織や加盟団体によっては出席者のスケールはかなり少さくなろう。

　評議員会には、評議員自身が出席することが最も望ましいのであり、今回の改訂は前進ではなく筆者にいわせれば、むしろ低迷打開の苦肉の策である。

　一人の代理出席も、一枚の委任状もない評議員会を開きたいという田村会長の真意を評議員諸賢と関係者はもういちど理解すべきだ。

　ところで、同席上、将来構想の一つとして評議員会に学識経験者（若干名）を加えたいという意向が田村会長から示された。

　これは明らかに〝前進〟意見であり、ぜひ実現へ検討を重ねて欲しい。今回の提案に限らず田村会長が積極的に日本協会運営に対し意見を述べられていることへ敬意を表したい。

（X）

「ハンドボール」10月号（第69号）目次

表紙写真＝日韓高校第2戦・下関中央工－朝鮮大附属高戦から（8月19日・駒沢）　**撮影・山田真市**

全日本男子第3次候補21名決まる

12月末に代表発表　欧州遠征勢に江名(三景)ら参加

日本協会は9月21日東京で、来春フランスで開かれる第7回世界男子7人制選手権に出場する全日本男子代表第3次候補選手21名の名簿を発表した。第3次候補選手は9月末と11月中旬に強化合宿を行ったのち、晴れの代表選手14名(予定)にしぼられることになっている。
代表選手の発表は12月20日東京で行われる第16回全日本選抜選手権最終日(閉会式)の予定。

世界選手権代表の座をめぐるはげしい技・心の磨きあいは、いよいよ大詰めに近づいた感じだ。

予想されたこととは云え今回発表された名簿の中には、5～7月のヨーロッパ遠征に参加した第2次候補16選手(北井選手は辞退・別掲)が揃って名を連ね、さらにこれまで全日本強化選手(全日本B)として、ナショナルチーム(第2次候補)のウェーティングメンバーであった選手たちのなかからベテラン江名(立教大―三景)と小野口(立教大4年)、植木(中央大4年)、斎藤(日体大3年)、新実(芝浦工大2年)の現役4人が加えられたのは大いに注目される。14名の代表選手をめぐってますますその〝競争〟は厳しいものになったといえるだろう。

世界選手権全日本代表第3次候補選手

	氏名	所属	身長
▽GK	本田　洋	(日体大)	178cm
	福本　弘	(大崎電気)	173
	下里敏彦	(〃)	184
▽FP	竹野奉昭	(〃)	174
	井上素行	(〃)	170
	近藤信行	(〃)	170
	近森克彦	(〃)	181
	飯田誠行	(〃)	189
	平岡秀雄	(〃)	183
	東　一敏	(〃)	179
	木野　実	(ワクナガ薬品)	180
	早川清孝	(〃)	179
	藤中憲二	(日体大)	177
	斎藤光男	(〃)	181
	小野口正二郎	(立教大)	170
	有永修二	(〃)	186
	江名英彦	(三景)	177
	野田　清	(大同製鋼)	169
	植木一久	(中央大)	180
	中井武三	(同志社大)	179
	新実俊夫	(芝浦工大)	179

FP平均身長　177.9cm
第1次　177cm　(34名)
第2次　178.1cm　(14名)

今回の第3次候補選手発表までに日本協会は、昨年末まず地方組織、加盟団体から候補選手の推せん書類を提出させ、選手強化対策本部(注・当時の名称、本部長荒川清美氏)の推せん者と合わせて98名をリストアップした。この98名の中から、強対本部によって40名の第1次候補選手が昨冬12月23日に発表された(本誌61号参照)この選手によって1月末に第1回合宿を行い、その結果、17名を第2次候補選手(全日本A)、23名を強化選手(全日本B)とした。

さらに第2次候補選手17名を強化のためヨーロッパへ派遣することを2月25日の全国評議員会で決め(本誌62号参照)5月14日から約2ケ月ルーマニア、ハンガリー、ユーゴ、西ドイツなどを〝武者修業〟して多大の成果をあげたのは周知のとおりである。

帰国後、8月末に第2次候補と強化選手の合同強化合宿が東京で行われ、そこでの資料と上半期各大会での実績などをかみ合はせて第3次候補選手21名の発表にこぎつけたものだ。なお3月16日の全国理事会で強対本部は強対委と改称され、委員長は村田弘氏(日体大出)がつとめている。

これまで日本は男子3回、女子2回(ほかに全日本学生1回)国際舞台に出場しているが、代表選手を選ぶまでに、このような厳格な経過をたどった例はない。

強化対策一切の責任をおっている選手強化対策委員会ではすでに9月25日から27日までの3日間第3次候補選手の第1回合宿(通算第6回)を東京・世田谷区体育館で行っているが、このあと11月12日から16日まで第2回合宿(通算第7回)を予定、最終選考へのデーターを整える。

北井選手が候補辞退

日本協会ではこのほど全日本第2次候補北井晴次選手(東京教大―埼玉教員ク)が同候補を辞退したと発表した。「技術的・体力的限界」というのがその理由。

全日本代表選考委員決まる

日本協会では、9月21日の全国理事会で、来春の世界選手権(45年2月26日～3月8日・フランス)に出場する全日本代表14選手(予定)を最終決定する選考委員として次の11氏を決めた。選考委員会は11月中に予備会議を1回開き12月中旬に代表を選考する予定。

荒川理事長、村田選手強化対策委員長、若崎技術部長、安藤審判部長、山田全日本教職連理事長、田中全日本学連理事長、稲石、中沢、高橋(英)、北川、勝各選手強化対策委員

なお、竹野選手強化対策委員(欧州遠征コーチ兼選手)は全日本第3次候補にリストアップされているということで選考委員から除かれた。

第3次候補が初合宿

全日本男子第3次候補の初合宿(全日本通算6回目)は9月25日から27日まで東京・世田谷体育館を練習場にして行われた。

村田委員長のほか勝、竹野、北川、高橋(英)各強化委員、選手21名が参加。今回は顔合せということだったが、最終選考を3ヶ月後に控えてどの選手もさすがに緊張気味。なお、この合宿を利用してNHKテレビスポーツ教室(11月9、16日放映)の取材が行われた。

理事長に 荒川清美氏再選
～全国理事会（9月21日 東京）～

日本協会全国理事会は9月21日東京渋谷の体協三〇一会議室で田村会長と23理事（欠席は3副会長など8名）が出席して開かれた。

各報告事項を承認したあと、日本協会の運営に関する問題が協議され、活発な議論の末、3月の全国理事会で決められた合議スタッフ制を廃め、理事長制を復活することになり、ただちに理事長選出の投票が行われた結果、荒川清美氏（理事、前理事長・日体大出）を再選、人事面で若干の異動を決めた。

このほか、今冬の全日本選抜選手権を男女各4チームで行うなどの注目すべき決定をみ、午後5時すぎ散会した。

※　※　※

合議スタッフ制を廃止

理事会は各専門部長の報告、村田選手強化対策委員長による全日本第3次候補名（本誌2頁参照）及び欧州遠征報告・今後の選手強化対策方針などを聞いたあと、日本協会運営に関する論議に入った。

この問題は今回の会議の焦点となっていたものである。上半期―特に7月末、それまでの方針を撤回して全日本第2次候補選手17名の国内試合出場規制を解除した合議スタッフの決定に対する巷間の反響は大きく、理事会の一部にも批判的なムードが流れていた。そのため事態の収拾と、運営体制のいっそうの強力化を企るべく田村会長（合議スタッフの代表者を兼ねている）が緊急招集したのがこの日の会議であった。

論議はかなり熱し、合議スタッフ制そのものへの疑問が強く出され理事長制復活の声が大きかった。

田村会長は、合議スタッフの構成メンバーである副会長3氏が不在（注・西氏は療養中、保坂氏は外国出張中、渡辺氏は陸連関係行事のためそれぞれ欠席）常務理事4氏も欠席（注・いずれも勤務の都合）していることなどから、この場で決議せず、結論の延期を提案したが変則的ともいえる合議スタッフ制をこのまま続けていくのは問題だとする意見が圧倒的で、田村会長と合議スタッフ（常務理事）も了承、ただちに理事長選出を行うという開会前には予想もされなかった進行になった。

理事長選出は無記名投票によって行われ、有効投票22（うち白紙2）のうち、荒川清美氏が16票を得て、再選が決まった。

荒川氏は昭和42年から今年2月までの1期間（任期2年）理事長をつとめており、7ヶ月ぶりの返り咲きといえる。なお新理事長の選出で若崎技術部長が代行していた国体委員は荒川氏になった。

新常務理事陣（敬称略）

○荒川　清美（理事長・会長推）
若崎　重富（会長推）　安藤　純光（会長推）
藤本　　強（会長推）　宮崎　慎六（会長推）
佐久間義雄（会長推）　渡辺　一己（会長推）
森岡　毅雄（会長推）○山田　　計（教職連）
○田中　滋章（実　連）○田中　秀夫（学　連）
○嶋田新太郎（高体連）○入江　暢一（関　東）
○杉山　　茂（会長推）　～○印は新任～

常務理事を増員 新たに企画部も設置

会議はつづいて荒川理事長の選出にともなう機構改革が論議されたが、田村会長の提唱する企画部の設置が承認されたほか、運営力強化のため常務理事数の定数改正による増員（＝規約改正）が協議された。これは、現行規約第14条第1項の7「常務理事10名以内」を「若干名」と変更するもので、全国評議員会の事後承諾を得ることになり、ただちに田村会長、荒川理事長らが人選を行った。その結果現理事から山田計、田中滋章、田中秀夫、嶋田新太郎、入江暢一の各氏と、先に辞任した河内鋭雄氏の補充として新たに会長推せん理事となった杉山茂氏（慶大ＯＢ）の6氏が推せんされ満場一致で承認、新常務理事13名は別表のような顔ぶれとなった。

なお、企画部の新設、岡村総務部長の辞任（別掲）などによって専門部長の異動も話し合われ、技術（若崎）、審判（安藤）、国際（宮崎）、財務（森岡）、編集（藤本）はこれまでどおりとし総務部長は当分の間、荒川理事長の兼務と決まった。

企画部長は連絡をうけた杉山氏が回答を保留、後日にもちこされた。なお、常務理事会には原則として村田選手強化対策委員長もオブザーバーとして出席する。

〝世界選手権基金運動〟さらに検討

田村会長の提唱による〝世界選手権基金運動〟は、先に全国評議員、全国理事からの賛否投票によって三分の二以上の賛成を得ながらも、その実施にあたっては、なお細部に検討の余地があるとして保留されていたが全国理事会席上で再協議各理事とも主旨に異論はなく、10月の全国理事会の時までにその実行方法について研究することとなった。

評議員代理者の資格変更

田村会長はかねてから全国評議員会の確立を企るため全国評議員の資格―特に代理者の資格について検討が必要であるとしていたが9月21日の全国理事会席上、その改訂案を示し、各理事の了解を求めた。

それによると、これまで全国評議員会に出席できる評議員（各組織及び加盟団体会長）は、各組織及び加盟団体の副会長（注・高体連は副部長）に限られていたがそれを各組織及び加盟団体の理事長またはそれに代わる者にまでワクを拡げようというもの。

これは、全国評議員会が、評議員の繁忙から常に出席者が少く、再三流会寸前にまでなっていたことによるもので、田村会長は全国

評議員の郵便投票で改訂を行いたい意向である。

また席上、森岡財務部長から「昭和43年度一般収支決算書」「同機関誌会計決算書」「未収金明細」が報告（別掲）され、両決算書を承認。未収金についてはすみやかに徴収方法をこうじることになった。

荒川理事長略歴

47才、福島県出身、日体大教授、日本協会理事。全日本学連理事長などのほか、第4回世界男子7人制選手権役員、東京オリンピックハンドボール強化委員を歴任。今春、日本協会が合議スタッフ制を採るまでは42年4月から理事長、昨年6月以降は選手強化対策本部長（初代）も兼務していた。

男女4強のリーグ戦で

今年の全日本選抜選手権（12月東京）

日本協会全国理事会は今冬12月東京体育館で開く第16回全日本選抜選手権大会の出場チームを男女それぞれ4チームとし、総当り戦（リーグ戦）で行うことに決めた。

選抜選手権は男子は6年前、女子は5年前から日本協会の推せんによる8チームによって予選・決勝リーグ制で5日間にわたり行われて来たが、内容をいっそうしぼるため4チーム総当り、3日間に改正されたものである。

今年の出場チームについては選こう委員会を編成して推せんすることになり次の7氏が委員に決まった。委員会は10月中に出場チーム案を決定し常務理事会へかける。

若崎技術部長、安藤審判部長、村田選手強化対策委員長、田中全日本学連理事長、田中全日本実連理事長、入江・嶋田常務理事

日本協会、今後の問題点

解説

多くの課題をかかえた日本協会が、それを乗り切るにはこの方法がいちばんよいだろうということで理事長制を廃止し「合議スタッフ制」という新機軸を生みだしたのが今年の3月。それから6月で理事長制復活が決まった。

朝令暮改ともいえるが、合議スタッフ制は、スタート当初から「あくまで暫定措置」（田村会長）と考えていたようであり、全日本第2次候補選手の国内試合出場規制解除による混乱の責任をとるという意味からも、この撤廃は今後にしこりを残すことにはなるまい。

問題は、再選された荒川理事長が、4月以来の合議スタッフをほとんどそっくりうけついで編成された常務理事会をどのように運用していくかにあろう。

というのも田村会長はじめ合議スタッフの多くは『理事長選出はしばらく時間をおいて、候補者をしぼったうえで決めよう』という気持ちが強かったと伝えられ、全国理事会席上、地方（ブロック）選出・加盟団体選出理事からの強硬な意見によって押し切られたいきさつがあるからだ。

荒川理事長が短時日のうちに常務理事会を掌握することが望まれる。

前の任期中、荒川氏は理事長と選手強化対策本部長を兼務して、しばしば両者の板ばさみになった苦い経験がある。今回は幸いにも選手強化対策委員長には、精力的な活動をつづけている村田弘氏がそのポストについており、荒川理事長は協会運営一本に専心できる

いずれにせよ、荒川理事長としては昭和42年4月に初めて理事長に就任した時よりも、責任はいっそう重大であり、常務理事会はもとより全国関係者一丸となっての〝団結協力〟が今ほど必要な時はなかろう。

田村―荒川ラインの活躍を期して待ちたい。（S）

国体時に2全国会議

日本協会は国体時恒例の全国理事会を10月26日18時から、全国評議員会を27日19時からいずれも長崎市で開くことに内定した。

岡村総務部長が辞任

総務部長・岡村昭二常務理事はこのほど田村会長あて辞表を提出、全国理事会ではこれを認めたが、同氏の豊かな経験は、協会運営に欠けないとして理事残留を要請することになった。

また、飯田昭常務理事も勤務上の都合で活動ができないため辞任した。

昭和43年度一般会計収支決算

収入の部	(単位円)
オリンピック基金	108,800
加盟金	340,000
登録金	1,256,200
大会参加料	196,000
検定料	1,250,000
審査料	250,500
ルールブック	518,450
補助金	3,101,840
雑収入	2,981,132
計	10,002,922

支出の部	(単位円)
会議費	377,110
渉外費	389,178
旅費・交通費	552,366
通信費	714,005
分担金	517,960
印刷費	846,510
大会諸費	133,818
消耗品・備品費	161,160
人件費	956,583
賃借費	720,050
予備費	1,959,729
大会補助金	1,176,333
大会参加料	266,000
雑損費	110,000
計	8,880,802
収支差益	1,122,120

昭和43年度機関誌会計収支決算

収入の部	(単位円)
購読料	1,832,660
広告料	850,000
計	2,682,660

支出の部	(単位円)
印刷製本費外	2,152,152
計	2,152,152
収支差益	530,508

未収金（44年5月31日現在）

項目	内訳	金額
▽加盟金		30,000
	40年度分	10,000
	41年度分	20,000
▽検定料		30,000
	41年度分	30,000
▽オリンピック基金		3,600
	40年度分	700
	41年度分	2,900
▽登録金		32,700
	40年度分	7,600
	41年度分	23,100
	43年度分	2,000
▽ルールブック代		163,000
	40年度扱	16,900
	42年度扱	47,550
	43年度扱	80,550
▽機関誌関係		726,300
	広告料	450,000
	購読料	276,300
▽その他（記録用紙代など）		144,212
計		1,129,812

全日本男子の国内転戦終る

地元選抜に6連勝

ヨーロッパ遠征の成果報告を兼ねた全日本男子チーム（村田弘監督ら渡欧メンバー19人）の国内サーキット（巡回試合）は9月3日熊本選抜との試合を第1戦に、19日の全愛知戦まで西日本を中心とした6都市で6試合が行われた。

全日本はさすがに強く、国体出場メンバーを主力とした地元チームをよせつけず6連勝を飾ったが各地とも全日本に寄せる期待と関心の高さを示し、初の試みとしては盛況だった。

①全日本 31—15 熊本選抜
②全日本 39—10 全　山　口
③全日本 32—16 大阪選抜
④全日本 30—5 全　京　都
⑤全日本 25—13 氷　見　ク
⑥全日本 30—13 全　愛　知

立ちあがり熊本が健斗

第1戦は3日午後6時から熊本市水前寺の熊本市体育館で熊本選抜と対戦。

全日本 31（20—6 11—9）15 熊本選抜

	【熊本選抜】	得
GK	浜（熊本ク）	0
	島田（教員ク）	0
FP	井（熊本ク）	5
	秦（熊本ク）	4
	毛利（熊本ク）	0
	沢田（教員ク）	0
	津田（教員ク）	2
	平井（教員ク）	0
	大宮（熊市商OB）	3
	元田（教員ク）	1
	三穂野（教員ク）	0
	江口（熊本ク）	0
	谷脇（教員ク）	0
	井手下（熊本ク）	0
	関（熊本ク）	0
	坂田（熊本ク）	0

	【全日本】	得
GK	下里	0
	福本	0
	本田	0
FP	東	3
	竹野	5
	飯田	2
	近藤	5
	近森	1
	野田	1
	井上	2
	北井	4
	平岡	1
	早川	4
	藤中	2
	中井	1

31　（2）　7MT　（5）　15

○……一ケ月半ぶりに試合のための編成をした全日本は立ちあがりもうひとつコンビが整わない。

そのスキを井、秦、大宮（現・長崎教員）らを中心とした熊本は巧くつき7MTも確実に決めて接戦となった。

しかし後半になると全日本はようやく攻守に本来の調子をとり戻し、15分までに10点を叩きだし守っても熊本のシュートをことごとくブロック、7MTの1点を失っただけで21—10と差をつけた。

終盤も全日本は北井、藤中らが好シュートを次々にゴールさせ疲れの出た熊本を圧倒した。

体力の差はつきり

第2戦は4日午後5時30分から山口県の下松市民体育館で全山口と対戦。審判は星井直、岡村久の両氏。

全日本 39（22—3 17—7）10 全山口

○……全日本は立ちあがりからスパート。近森、藤中らの豪快なシュートと野田、東、井上らの巧技をミックスさせて15分には7—3とリードした。

全山口も、相手の選手交替の虚をついて明石、白井がミドルシュートを決めて懸命に追撃、特に16分から連続3点を奪い、6—8と迫ったあたりは鮮やかだった。

しかし次第に体力の差が現れはじめ、特に後半は全日本の猛攻にまったく手のうちようがなく11分から連続15点を許し大敗を余儀なくされた。

	【全山口】	得
GK	山本（徳山ク）	0
	竹下（徳山ク）	0
FP	青木（徳山ク）	1
	明石（徳山ク）	4
	白井（徳山ク）	2
	福島（出光石油）	1
	宇山（徳山ク）	0
	徳永（徳山ク）	2
	松村（武田薬品）	0
	伊ケ崎（徳山ク）	0
	浜岡（徳山ク）	0
	福田（徳山ク）	0
	宮崎（徳山ク）	0
	仁科（武田薬品）	0

	【全日本】	得
GK	本田	0
	下里	0
	福本	0
FP	野田	4
	井上	2
	藤中	8
	飯田	3
	平岡	3
	近森	3
	竹野	1
	中井	3
	早川	5
	東	4
	近藤	0
	北井	3

39（2）　7MT　（2）　10

攻守に余裕示す

第3戦は5日午後6時から大阪府立体育会館で大阪選抜と対戦。審判は高倉大佑、井上祐人の両氏。

全日本 32（20—11 12—5）16 大阪選抜

○……社会人の巧さに学生の力を加えた大阪の試合ぶりが注目された。先手は全日本がとったが大阪は8分馬着のゲットで3—2と逆転する健斗。しかし全日本はこのあと木野、近森のゴールであっさり主導権を奪い返し後半開始直後松田に連続シュートを許して13—8と5点差にされた以外は危気ない試合ぶりで、特に攻撃は余裕たっぷりなところをみせた。

点差の割に冗長感がなかったのは全日本が随所に巧妙なパスワークからヤマ場をつくったことと、大阪の若手選手が果敢なプレーをみせたことにある。

	【大阪選抜】	得
GK	島崎（イーグルス）	0
	寺田（佐野工ク）	0
FP	東（イーグルス）	1
	市原（ワクナガ薬品）	2
	吉川（宗形製作所）	2
	福井（イーグルス）	0
	樫塚（イーグルス）	2
	馬着（関西大）	2
	松田（関西大）	5
	森（ワクナガ薬品）	1
	青山（宗形製作所）	0
	村上（宗形製作所）	0
	高橋（ワクナガ薬品）	1
	脇田（大阪経大）	0
	三国（桃山学院大）	0

	【全日本】	得
GK	福本	0
	本田	0
	下里	0
FP	飯田	2
	近森	4
	木野	5
	東	4
	中井	1
	早川	3
	平岡	1
	藤中	0
	北井	3
	近藤	3
	井上	3
	野田	1
	竹野	2

32　（4）　7MT　（1）　16

圧倒の攻撃力……多彩な展開

第4戦は7日午後5時30分から京都市体育館で全京都と対戦。審判は、門前和、中塚優の両氏。

全日本 30（16—3 14—2）5 全京都

○……前半5分2—0から京都は土田がゲット、気勢をあげたのだが、全日本はこのあと一気にその力を爆発させ、ほとんど1分おきに得点をマーク、18分11—1と開いた。

全京都はベテランが多く、しかも力より技に頼るタイプだけに、全日本が攻守に精力的な動きを示しては、つけいるスキはまったくないといってよかった。

後半も全日本は攻撃の手をゆるめずフェイントパスなどを使いこなした多彩な展開で大勝した。

たくましいチームプレー

第5戦は8日午後後4時から富山県・高岡高校体育館で氷見クラ

ブ（富山）と対戦。

全日本 25（13—5、12—8）13 氷見ク

○……氷見クは、全日本の高く厚い壁を破って先取点をあげて会場を沸かせた。

前半20分頃まで氷見ク優勢のうちに試合は進められたものの全日本は後半たくましいチームプレーから木野、早川、近藤などの鋭いシュートであっという間に逆転した。25—13で試合を終ったが氷見クの善戦といえる。

氷見クの健斗のなかでゴールキーパー中山の好守備は特に光っていた。全日本は再三のチャンスを気力にあふれた中山のプレーにはばまれたのである。しかし、スピードにあふれた全日本の攻撃は時間の経過とともに調子をあげ〝さすが〟と思わせた。

こうした機会を通じて県内中高校チームの練習の中に、秀れた全日本の個人技が活かされるようなら今後の富山県ハンドボール界に大いにプラスとなろう。

得	【全日本】		【全京都】		得
0	下里	GK	兼	（京都ク）	0
0	福本	GK	小西	（京都ク）	0
0	本田	GK			
7	中井	FP	土田	（篁会）	1
5	平岡	FP	石井	（京都ク）	0
3	飯田	FP	竹口	（葵ク）	1
4	野田	FP	山口	（京都ク）	0
1	近森	FP	光田	（同志社大）	0
0	近藤	FP	橋本	（星友会）	1
1	木野	FP	福井	（京都信用金庫）	0
2	藤中	FP	日下部	（京大）	0
4	早川	FP	中井	（京都ク）	1
0	井上	FP	木村	（京都ク）	0
0	竹野	FP	出野	（京都ク）	1
2	東	FP	安達	（京都ク）	0
		FP	守本	（京都市役所）	0
		FP	小田	（京都産大）	0
		FP	伊藤	（立命館大）	0
		FP	藤森	（京大）	0
		FP	清水	（篁会）	0
		FP	駒井	（京都教大）	0
30	（3）	7MT		（1）	5

後半に地力を発揮

第6戦は19日午後6時から名古屋市・愛知県体育館で全愛知と対戦。審判は浅野克彦、鈴木四郎の両氏。

全日本 30（17—5、13—8）全愛知

○……全日本は立ちあがりから速攻をかけ、10分までに5点をあげ特にこの日はミドルシュートをよく決めて豪快なプレーの片りんを示した。15分8—1とリードしたところで攻撃の手を休めたため、全愛知・西尾・安藤らの反撃にあって点差をつめられ、後半2分には13—9となった。

しかし、全日本はこのあと再びセットによる多彩な攻撃と、積極的な守りから一気になだれこむなど地力を存分に発揮、一方的な試合とした。

村田全日本監督の話 全日本にとっては、改めてこの転戦で〝収獲〟を得るということはなかったが、各地で関係者やファンの暖かな声援を受けたことで選手たちも自分たちに寄せられる期待と責任感を再認識したと思う。今後も機会をみて国内転戦を行いたい。

有永（立教大）膝痛で欠場

全日本・有永修二選手（立教大3年）はルーマニア遠征中に痛めた右ヒザが関節炎と判り、今回の国内転戦に同行したものの試合には出なかった。

11月中旬に関東学生と

強化対策委では、11月15日又は16日東京で全日本（第3次候補）×関東学生選抜戦を行う予定。（会場未定）

全日本が実技を担当

NHKスポーツ教室

今年のNHKテレビスポーツ教室〝ハンドボール編〟は11月9、16の両日教育テレビの午前9時から1時間にわたって放送される予定だが、実技は全日本男子（第3次候補）によって行われる。

【氷見ク】		【全日本】
中山	GK	福本
中野	GK	本田
大野	FP	下里
関盛	FP	野田
稲積	FP	近森
関	FP	木野
森	FP	近藤
山本	FP	藤中
福田	FP	中井
古野	FP	早川
庄地	FP	井上
高橋	FP	東
谷口	FP	平岡
鏡宮	FP	竹野
	FP	北井
	FP	飯田

【写真】初の国内遠征を行った全日本ナショナルチーム（第2次候補）。前列左から井上、福本、竹野コーチ兼選手、村田監督、勝コーチ、野田、近藤後列左から中井、本田、東、平岡、下里、飯田、木野、有永、近森、藤中、早川の各選手。

得	【全日本】		【全愛知】		得
0	本田	GK	柴田	（中京ク）	0
0	下里	GK	合田	（富士鉄）	0
0	福本	FP	安藤	（中京ク）	2
1	飯田	FP	高橋	（富士鉄）	1
1	近森	FP	千葉	（名城ク）	2
0	木野	FP	西尾	（中京ク）	4
4	藤中	FP	牧	（中京ク）	1
2	近藤	FP	餅原	（日本碍子）	1
7	野田	FP	黒岩	（富士鉄）	2
0	竹野	FP	小川	（桜丘会）	0
4	平岡	FP			
2	中井	FP			
3	東	FP			
2	早川	FP			
0	北井	FP			
4	井上	FP			
30	（1）	7MT		（0）	13

全日本男子チームをみて

光島磯雄（全大阪監督）

周知の通り、「素質、体格（体力）、経験」の豊富な多数の候補者の中から選抜されたナショナルチームのメンバーは、さすがに長期にわたるハードスケジュールを無事克服し、渡欧前と比べ、はるかに見ちがえる程の力量を示す成長ぶりを披露してくれたわけでありますが、総括的にみて目についたこと、気がかりなことなど書きしるしてみることにします。

まず、最初に申し上げることは基礎技術的には、欧州ハンドボールの波に揉まれため、個々の敏捷性とボール支配力（キープ力）の増大については明らかに著るしいものがあるにもかかわらず、その反面、戦術作戦面では、日本が世界ハンドボールに確固たる地位を占めるための必須条件である「日本的ハンドボール」の強調という点についての開拓には未だしの感を拒むことができないのであります。

国内における相手チームは、何といっても即製の選抜チームであり、前記の「素質、体格(体力)、経験」等の緒点では、優劣を論ずる以前のことであるのはやむをえない状況であるとしても、ナショナルチームはゲーム内容に一種のものたりなさを感じさせました。

攻撃については、六十分間を通じて単調さが目立ちました。というのは、たとえば右サイドからの攻めにはよく考えられた、又はよく呼吸の合ったコンビが臨機応変に発揮されていましたが、逆サイドからは円滑さが乏しかったようであります。これというのも、いざという決めどころになる前に、相手側デフェンスが早く崩れるという場面が多いためかも知れません。事実、相手の凡ミスに乗じてボールをうばい反撃速攻によるものが全得点数の半分を越しているということも、その後のナショナルチームの各地での対戦スコアでもうなづけることであります。

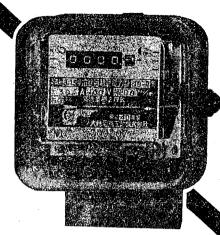
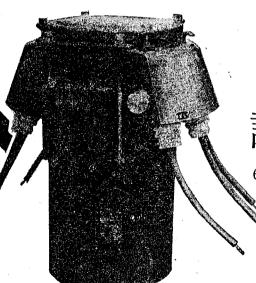
しかしながら、このような場面が続くと、実力あるチームですらゲーム中の各プレーに「切れ」（クイックプレーによるコンビ）が見られなくなり、あわせて斗志の面でも消極的な雰囲気に陥りやすいものであります。

防禦については、中央がおおむね長身者で固められているわりには、サイドステップと前後のまとまりがもう一つものたりなく、度々案外簡単に相手側の突入得点を許していたようですが、これが地方チームやファンへのサービス精神であってはなりません。

GKについては、ボール捌き、良い位置を先取するタイミング、パスアウト等の技術は、渡欧前に比べ明らかに大きな進境を認めます。三人とも立派なそれぞれの特長を持ったGKで頼もしく思いますが、より一層の反射神経の効果的なプレーを期待します。特に、欧州ハンドボールの示す長身、強肩に対処出来ることを目指すならば、普通尋常のことではとうていボールはとれないでありましょう。

大阪と京都でのゲームをみた限りでは、数年前までは日本チームが欧州遠征した時に、外国からこのように痛めつけられたであろうと思えるようなゲーム内容を、この度は立場を逆にして示してくれたとの感じが強かったのは私達だけでしょうか。先年来訪したネデフ氏の言を待つまでもなく、我々の日本ハンドボールはあくまでも日本の三十数年の伝統の中に、外国の真似のできない長所、すなわちクイックパスプレー、フットワークプレーの妙味を再確認し、これを最大に活用錬成し、あわせて欧州式の剛的要素を会得同化するという意味を失ってもらいたくないのであります。

今後の各位の精進努力により、今より格段の発展を心から希望します。（写真は全日本―全京都戦から・光島氏掲影）

西軍、5年ぶりに勝つ　女子も西軍

男子第19回、女子第1回全日本学生選抜東西対抗戦は9月7日午後1時から四千近い観衆を集めた名古屋市・愛知県体育館で行われ、男子は気力充実の西軍が後半、東軍の猛反撃をかわして5年ぶりに勝ち、女子も西軍が記念の第1戦を飾った。

全日本学生選抜東西対抗

▽男子

西軍	17	6	11
東軍	16	11	5

得	【西軍】		【東軍】	得
0	今井（大阪経大）	GK	大村（日体大）	0
3	馬着（関西大）	FP	井上（日体大）	2
5	松田（関西大）	FP	植木（中央大）	1
2	許（関西大）	FP	藤井（明治大）	6
2	西脇（関西大）	FP	笠原（日体大）	2
1	宮松（関西大）	FP	斎藤（日体大）	3
1	脇田（大阪経大）	FP	氷海（日体大）	0
17				16
（3）		7MT		（2）

▽審判，鈴木(四)・奥村

【交代選手】▽西軍GK入江（関西大・得0）FP町田（同志社大・得1）、中野（同志社大・得1）、水野（大阪経大・得1）、三国(桃山学院・得0)、木原（松山商大・得0)、木村（松山商大・得0)、岩原（西南学院・得0）
▽東軍GK上野(東京教大・得0)FP小野口（立教大・得4）、谷藤(日体大・得0)、大川（日体大・得0)、鈴木(中京大・得0)、石川（名大・得0)、門脇（東北学院・得0)、村沢（富山大・得0）

【後記】4連敗している西軍はなんとしても勝ちたいところだ。その斗志がはっきりプレーに現れた

先手は2分東軍斎藤がとったが西軍はすぐに脇田がとり返し、そのあと休む間もなく3分松田、4分許、8分宮松が得点。中央からの速攻、サイドからのゆさぶりなど活気のある攻めっぷりだった。

東軍は逆に攻撃が単調なうえ、守りにも粘りがない。13分藤井が2点目をあげたが、1―6から西軍の気力鋭い攻撃を防ぎ切れず17分には8―2と点差が開いた。

結果的にはここでの〃差〃が勝負につながった。

○……劣勢の東軍が地力をのぞかせたのは前半終了まぎわから。藤井が一人奮戦して3点をもぎとり5―11。

さらに後半に入って猛反撃に転じ、激しい動きから西軍の追加点を封じる一方、斎藤のロングシュート、井上、藤井らの巧妙なプレーで後半10分9―13、15分12―13とみるみるうちに点差を縮めた。

西軍は前半のような粘りのあるディフェンスがみられず、勢いにのった東軍にここで一気に主導権を奪われるかとさえ見えたが、16分と20分松田がよくゴールを決めて15―12としたのが大きかった。

○……必死の東軍は21分、22分小野口が得意のアンダシュートを決めて1点差（14―15）。場内騒然となるうちに西軍は23分馬着がゴール。追いあげる東軍は24分植木26分小野口のゴールで三たび1点差とし近来にない白熱した好ゲームとなった。

残り3分、西軍は松田がシュートを決めて17―15。東軍は28分焦る西軍から7MTを誘って小野口がゴール、16―17だ。ここで西軍はパスをつないで逃げこみの態勢をとり、東軍のアタックをかわし切った。

○……有利を予想された東軍は前半の不出来が最後までひびいたが西軍の勝利への執念に、つねに一歩をゆずっていた感じである。

ともあれ後半なんども追いこまれながら踏みこたえてタイ・スコアを許さなかった西軍の粘りはみごとであり、この1勝が西日本各校の奮起につながれば11月の全日本学生選手権は久々に関東勢一色から東西の角逐を期待することができよう。

なお、西軍監督は新月嘉重氏（関大監督）、東軍監督は田中秀夫氏（中央大監督）がつとめた。

安田と北岡（西軍）が活躍

▽女子

西軍	9	4	5
東軍	7	3	4

得	【西軍】		【東軍】	得
0	北岡（中京女大）	GK	秋間（日体大）	0
0	砂浜（中京大）	FP	津熊（日体大）	1
2	森（中京大）	FP	中村（日体大）	0
5	安田（中京大）	FP	永田（日体大）	1
1	石山（中京大）	FP	木村（日体大）	1
0	大崎（中京女大）	FP	熊谷（東女体大）	1
0	吉開（甲子園大）	FP	姫野（東女体大）	2
9				7
（1）		7MT		（3）

▽審判，赤松・浅野

【交代選手】▽西軍GK佐野（中京大・得0）FP窪田（中京大得0)、中本（甲子園大・得1)、森崎（大阪体大・得0)、野口（中京大・得0)、近藤(中京女大・得0)、坂本（大阪体大・得0）中路（武庫川女大・得0）
▽東軍GK坂野(東女体大・得0）FP沢谷（日体大・得0)、佐藤(日体大・得0)、上野（日女体大・得1)、中島（東女体大・得0）、高橋恭（東女体大・得0)、高橋清（東女体大・得0)、山口（東京教大・得0）

【後記】東軍は立ちあがり1分姫野のゲットで先取点をあげた。

西軍もよく追いかけたが2―1(10分)、3―2（15分)、4―3(19分）と東軍はたえず先行。20

分西軍は森のゴールで同点（4—4）に追いついたあと、21分鮮やかな速攻から安田が決めて逆転した。

○……リードされた東軍は後半5分熊谷の得点でいちどは追いっいたのだが、西軍の動きははるかに東軍をうわまわり、特にタテの鋭い攻撃から安田がシャープなプレーで6分、10分、11分と連続3本のシュートを決めたのはみごとだった。

5—8と劣勢の東軍にもチャンスは再三あったがもうひとつ攻め口に鋭さがなく、しかも8分すぎつづけてつかんだノーマークの得点機を、ことごとく西軍GK北岡の堅守に阻まれたのは痛かった。

○……東軍は5分から17分間、西軍は12分から8分間無得点。ここらあたりに女子学生界の課題がありはしないか。

西軍は20分当り屋・安田がダメ押しともいえる1点を加えて9—5。奮起した東軍は22分上野、23分津熊（7MT）で反撃の気勢を示したのだが、そのあと追いこむだけの〝時間〟は残っていなかった。

○……西軍は東軍の攻撃をゴール前の激しいつぶしで封じるなどチームプレーにまとまりがあったろう、攻の安田、守の北岡と殊動者が出て会心の勝利といってもよかった。

なお、監督は西軍・宇津野年一氏（中京大コーチ）、東軍・藤原侑氏（日体大監督）だった。

後評・藤松 博

今年から女子の東西対抗戦が発足し、東西対抗戦の歴史に色を添えることとなった。事実ゲーム内容も非常に面白く、大方の予想に反し、西軍の勝利に終った。

女子の東軍は、日体大、東女体大を中心として定評のある好プレヤーを揃え、持ち前のスピードと優れた個人技で、戦う前からあきらかに西軍に比べ強いという印象をうけた。これに対し、西軍は、中京大、中京女子大、大阪体大、甲子園大の混成チームで、それ程傑出したプレーヤーは見当らない。しかし、ゲームの結果は勿論、ゲーム内容から云っても、圧倒的に西軍の勝利に終ったと思う。

個人技と、チームワークとの対決の様な印象をうけたのは、筆者一人では無かったと思う。西軍監督宇津野氏は、有名なチーム育ての名人である。練習は勿論ゲーム中でも選手の特徴をうまく使い効率の良いゲーム展開をみせてくれた。東軍に勝つ為にはチームワーク以外無いとの方針から、合宿を数回行い混成チームの弱点をカバーする様に努力して試合にのぞんだその意気の前に東軍が屈した様に思われる。

どうもこの種の選抜試合には、本来のチームゲームとしての面白さよりも個人技に走る傾向は止むを得ない事とは云いながら、チームゲーム本来の妙味を忘れること無く努力して欲しいと思う。その意味での女子西軍の勝利は、貴重なものであった様に思う。

男子については、前半の圧倒的なリードが東軍の各選手の心理的な面に影響したのか全般に西軍のペースで終った感がする。

西軍の勝利の原動力は、松田君（関大）のポストプレーとゴールキーパーの入江君（関大）のプレーにあった様に思う。特に松田君は、寝屋川高校で木野（全日本）選手あたりとコンビを組んでいたとか。非常にうまい。彼のチャンスメーカーとしての動きに東軍が敗れた様に思う。

しかし、内容的には、女子に比べ、それ程見るべきものが無かった。その原因について種々考えてみるに、先ず第1には、9月上旬という時期の問題がある様だ。暑中休暇、選抜混成チームなどの原因から個人練習量は勿論のこと、チームとしての練習期間が短かい為に充実したプレーを展開し切れずに終る様に思う。またその他の原因としては、昨年頃からその傾向が見えはじめていたが、東西対抗戦に対する意識のマンネリ化がある様に思う。選手個人にすれば出ることに意味があるかも知れないが、ゲームである以上、相手に勝つ努力を、選ばれた栄誉と責任のもとで果して欲しい。勿論、学生王座の無くなった現在吾々関係者も、選手のこうした意識を脱皮さす努力をしなければならない。最後に、地方の関係者として云えば選抜メンバーに選ばれながら、最後まで試合に出る機会の無かった選手を気の毒に思うのは、無理な事だろうか。

（東海学連理事長）

これまでの成績
（7人制以後）

回	年	勝	スコア	敗
⑬	昭38	東	27—13	西
⑭	昭39	西	29—23	東
⑮	昭40	東	26—24	西
⑯	昭41	東	26—22	西
⑰	昭42	東	27—17	西
⑱	昭43	東	23—15	西
⑲	昭44	西	17—16	東

11人制　両軍6勝6敗

女①　昭44　西9—7東

月例常務理事会議事録

7月10日(抜すい)

一、IHFへミュンヘンオリンピックハンドボール競技のチーム数について質問状を発送した(渡辺副会長)

一、第1回全自衛隊選抜大会(7月11日・駒沢)の主催は日本協会とするが開催までの経過は必しも万全ではなく、今後は充分な連絡・手続きを行って対処していく。

一、全日本教職員連盟から、全日本教職員選手権時(8月・上尾)に全国中学校指導講習会を行いたいとの希望が出されているが文部省との関係で延期し、本年11月頃にこのような企画を予定したい。

(技術部)

臨時常務理事会議事録

7月28日(抜すい)

一、海外遠征・派遣報告

イ、全日本男子欧州遠征報告

ロ、IHF審判講習会出席報告

ハ、日体大韓国遠征報告

一、日韓高校スポーツ競技会の競技役員は、都高体連からの希望も含めて構成する。

一、審判用ワッペンを補充作成する(審判・技術部)

一、全日本男子第3次候補選手選考委員は次の6氏とする。

田村会長、若崎技術部長、安藤審判部長、村田強対委員長、勝強対委員、竹野強対委員

なお6氏は強化選手(全日本B)追加候補の選考にもあたる。

一、選手強化対策委員を8月各地で開かれる各全日本選手権へ派遣する。

一、全日本男子チームの国内巡回試合の交渉窓口は今後は日本協会が行う。各地方協会に開催希望を問うことにする。

一、欧州遠征コーチ団(村田、勝竹野)の意見により全日本第2次候補選手(欧州遠征メンバー)の国内試合出場規制を解く、解除は即日としたい。

コーチ団の意見は『選手個人の精神的な問題、技術向上、対抗意識、ゲーム感覚など総合的にみて国内試合規制は好ましくない』というもの。

一、外国チームの来日希望について(村田氏の報告)

イ、ソビエトが45年8月を希望(但し、46年に日本を招待する)

ロ、西ドイツナショナルが来年の万国博記念スポーツ交歓競技会に参加したい意向。

ハ、西ドイツのクラブ「ラインハウゼン」など数チーム(単独)が希望

二、ルーマニアが45年に来日したい意向をもっていたがおそらく来征できない。

月例常務理事会議事録

8月19日(抜すい)

一、8月11日からの体協2級トレーナー講習会を餅田茂(秋田)、徳田通昭(京都)の両氏が受講。

一、全日本教職員選手権決勝記録の報道関係の誤報について原因(ニュースソース)を追求する。

(注)埼玉協会の報告では正しい結果を報道関係(埼玉県庁内記者クラブ)に通達している。

一、全日本総合選手権における全東教大チーム(東京)のマナー(行動)について

イ、大会前の会議を時間延長してまで論議を重ねたにもかかわらず遺憾な態度をとったことは地元関係者・有識者に対して礼を欠いた行動である。

ロ、日本協会側の反省も必要である。合議スタッフ(常務理事会)の姿勢を正したい。(以上会長発言)

ハ、不手際の責任は大会委員長にあり、進退を会長に一任する(若崎技術部長=大会委員長)

二、次回の常務理事会、全国理事会で改めて検討する。

一、9月21日午前10時から全国理事会を東京に招集する。

月例常務理事会議事録

9月12日(抜すい)

一、全国理事会の議案について検討。

一、財政難解決の一法として機関誌関係の値上げを検討するが、原則として購読料はすえおき、広告料収入の増大を企る。

宋丙堂氏(台湾)ら来日

台湾ハンドボール界の推進役として活躍中の早大OB宋丙堂氏(台北市立華江女子中教員)は、同氏とともに活動している温展洪、陳金樹の両氏と7月29日に来日。富岡市の全日本高校、盛岡市の全日本総合選手権などを視察した。

宋氏は戦前、早大の名バックスとして関東学生リーグなど各大会に出場、日本球界に知己も多く各地で旧交をあたためていた。

一行は8月20日帰国したが宋氏は『台湾でハンドボールをはじめたのは3年前から。小学生の間にたいへん普及しており将来性は大いにある。まだ協会がないので組織づくりも急がねばならない。一日も早く日本と交流できるよう努力をつづけたい』と元気に話していた。なお、日本協会ではIHFなどに対し台湾球界の活動を伝達しているが、近い将来韓国を加えた3国によってアジア連盟を結成する構想をもっている。【盛岡市で全日本総合選手権を見学する右から宋、陳、温の各氏(岩手日報提供)】

◎球界パトロール　～二つの底辺活動～

第2回東海地区ハンドボール少年団交歓会

○……日本協会のハンドボール少年団活動は40年8月横浜で華々しく全国交歓会を行ったあと、なりを静めた感じだが、地方協会ではここ一・二年地味ながら堅実にその歩みを伸ばしているようだ。

特に東海協会では昨年からブロック事業の一つとして行事に組み入れ積極的な姿勢を示している。

○……2年目を迎えた今年の大会は、海水浴地として有名な愛知県蒲郡市のキャンプセンター・相楽山荘を使って8月20、21日の両日（1泊2日）に行われた。

参加したのは東海4県の協会が推せんした男子の岐阜ク、吉原一中同好会（静岡）、笹島ハンドボール少年団、正色ハンドボール少年団（以上愛知）、女子の岐阜ク吉原一中同好会（静岡）、三泗ク（三重）、笹島ハンドボール少年団（愛知）の8グループ。

○……第1日＝入村式・開会式、交歓会、キャンプファイヤー。第2日＝ハンドボール教室、午後1時解散というプログラムにしたがって小学5年生から中学3年生まで約百名の少年少女が林間のテント村をベースに和やかな交歓風景を描き出した。2日目のハンドボール教室は三谷中学グランド（蒲郡市）で西川愛知協会常任理事を中心とした愛知協会、蒲郡協会役員によって指導が行われたがハンドボールを活動の主体としたグループばかりなため県対抗の交歓ゲームも行われるなどなかなか活気のある展開だった。

○……スポーツ少年団活動そのものが多くの問題をかかえてこんでおり、一部には〝再検討〟の声も聞かれる昨今だけに、東海協会のこの事業にも課題は多いようだが東海地区といえば日本ハンドボール界の名実ともにトップゾーン。近い将来は会期を2泊3日から4泊5日、参加者も二百名にまで伸ばそうと関係者の意欲はなみなみならぬものがある。【写真はハンドボール教室の開会式とテント村風景】

第18回近畿中学総体ハンドボール

熱心な父兄たち
高校級のチームも

▽……斯界唯一のブロック中学大会である。

昭和27年、第1回大会が始められた時からハンドボールは正式種目に採用されており、関西におけるハンドボールの〝位置の高さ〟を示してもいるのだが、年々活気をまし、今年は2府4県の予選を勝ち抜いた男女各12校が参加、8月23、24日の両日京都・伏見工高球技場で行われた。

▽……底辺拡大を呼びながらも関係者はともすれば〝高校以上〟に目をやり勝ちで、事実これだけの球史を刻んだ近畿でも中学軽視の県が一、二あるというが、今年は京都協会、京都高体連が全面的にバックアップ。

やはり中学球界の拡充を果すには既存の力の後援は欠かせない。

審判員も中学校関係者だけで全試合を管理するだけの数が不足しているし、日頃、試合が少いだけにそれらの人々の審判技術も必しも満足ではない。

▽……このほか『中学では顧問の指導下でないと活動できない学校が多く練習時間も少ない。そのため技術練習に重点がおかれ、基礎技術・基礎体力のおくれが目立つ。特に体力が不充分なためちよつとしたことで事故（主に脱臼裂傷）がおきる』（門前大会審判長の所感）という。

▽……しかし、選手のマナーのよさと応援につきそって来た父兄たちの関心の高さは想像以上に高い技術的にも大会毎にレベルアップしており、男子決勝の布引中（兵庫）―福島南中（大阪）戦などは高校生にも劣らない技術と体力を身につけていた。父兄を中心とした多くの観衆にとりかこまれた中学選手の躍動は球界の前途に明かるい希望を感じさせるに充分だ。日本協会、地方協会を問はず「中学体育指導要領」採用を機に本格的に中学球界の育成に取り組む機は熟したといえよう。

▼大会成績・男子準々決勝

福泉南（大阪）18－5 打田（和歌山）
斑鳩（奈良）13－6 浜寺（大阪）
布引（兵庫）15－8 守山（滋賀）
生駒（奈良）11－6 望海（兵庫）

▽同準決勝

福島南 14－5 生駒
布引 15－9 斑鳩

▽同決勝

布引 11（3－4、8－6）10 福島南

▽女子準々決勝

皆山（京都）4－3 秦荘（滋賀）
城東五（大阪）14－6 岩出（和歌山）
大淀（大阪）17－0 鞆渕（和歌山）
生駒（奈良）10－2 守山（滋賀）

▽同準決勝

皆山 10－7 城東五
大淀 8－2 生駒

▽同決勝

大淀 6（1－3、5－1）4 皆山

李載鎬（韓国）監督に聞く

朝鮮大附高の監督として来日した李載鎬氏（47才）は光州ハンドボール協会副会長。わずかな時間だったが韓国球界の近況などを聞いてみた。（編集部）

※

――日本の高校チームをどう思うか。

李監督　去年下関中央工が韓国に来ているのでだいたいのことは判っていた。思ったとおりといってもよい。

――朝鮮大附高は実力を充分に発揮できたか。

李監督　選手が若いだけに食生活の変化が少し影響した。全勝するつもりで来たが第2戦は前半に点をとられすぎた。

――朝鮮大附高の試合ぶりはつねに今回のようなものか。

李監督　だいたいそうだ。

――中盤の動きが遅くスピード感に乏しいように感じるが。

李監督　（かたわらの金茂錬コーチと話しあったあとで）相手によって当然とる策戦もかわると思う今回は選手たちが非常に慎重だったとはいえる。

――韓国高校界の近況は

李監督　ハンドボールの競技人口は高校に限らずすべて増えて来ている。高校選手権には全国から40校近く集るようになった。国民学校（小学校）の体育にも採り入れられており、将来さらに普及するだろう。

――日韓高校交流について。

李監督　大変意義のあることだ。これによって若いプレイヤーにはげみを与えることが出来るし技術の交流も出来る。お互いのよいところを学びとりあいたい。

――日韓ハンドボール界の交流については。

李監督　高校の交流復活をキッカケとして大学も交流が再開できた日本ハンドボール界はヨーロッパとも積極的に接触しているようだし、われわれは大いに関心を持っている。いっそう両国ハンドボール界の結びつきが密接になることを期待したい。これまでいちども交流していない女子については特に強く希望する。

――李さんもハンドボールの出身ですか。

李監督　私の専問はテニス。韓国のハンドボール指導者（コーチ）は若い人が多くなって来ている。

【写真は田村日本協会々長(左)と歓談する李載鎬監督】

日体大韓国遠征日記（下）

北川勇喜
（日体大監督）

▽7月13日、朝早く目をさます。前夜の興奮の割には爽快である。こんなムードの時には今までも絶対負けたことがない。

第2戦の相手は慶熙大。体育館に着いて観客席をみわたすと三分の二の入り。選手も多少胸をなでおろした感じである。

まだ一戦だけの経験だが、まったく、当地の声援ははげしいものがある。

昨日と違ってセレモニーも短かく充分な練習時間がある。なにもかも事がうまく運んでいるので余裕をもてる。

ホイッスルが鳴る。昨日と同様韓国ペース、いつもながらどうも立ち上がりが悪い。しかし、昨日とは違い大砲（斎藤）がすこぶる快調なので安心である。ロングシュート、サイド攻撃、ポストプレーとバラエティーに富んだ攻撃で次々と加点、20分に8－3と5点リードする。ところがこのあとの攻撃が雑で、イージーチャンス、イージーシュートを続けて落として逆速攻をかけられ更に、左の李鍾南のシュートが決まって前半8－6で終了。

ハーフタイムの策戦では、後半トップのガードを李鍾南への密着ガードに切替え、更に「強引に割り込むプレーヤーに対して二人で協力してコースを庶断せよ。攻撃はサイドラインが狭いことから、相手は激しい飛び出しデフェンスを布くので、前進したデフェンサーの後ろに素早くポスチャーは入り縦のラインを、多く使って攻撃せよ」と指令した。だが、時間をかけて叩き込み数多くの試行錯誤をくり返して、ここまで来たうちの選手にとって、体質や気質のまったく違う外国の選手に完全に打ち勝つには時間が必要のようだ。

結局、指示も徹底せず、追い上げられて一度はタイにされた。只昨日と違うところは気迫があり、勝負に対して韓国選手以上に意欲的、執念を燃やして戦い、それが勝利の原動力となった。スコアは15対13。

試合終了後慶熙大学主催のレセプションに向う。荒川先生より慶熙大学のことは聞いていたが着いて驚いた。後方を山に囲まれた30万坪の広大な土地の中央にそびえ立つ総長の官邸、その眼下に各大学（日本では学部）がスマートに高く、あるいは低く、どっしりと実に自然との調和も鮮やかに建ち並んでいる。この大学を僅か20年間でこれ迄にしたという設立者の富と、知恵と、勇気・実行力に敬意を感じた。特に、印象に残ったのは谷間をうまく利用したグランドだ。50段もあろうと思われるコンクリートで固めた観客席、選手の一人が思わず階段を下りてグランドに飛び出した。無理もない毎日竽の子を洗うような狭いグランドでわれわれは練習をしているのだから……。

本館の見学では大理石の階段に目を見はる。昨年世界総長会議を開催した時に、ここで総会をしたのだそうだ。

このあと、盛大なレセプションに臨む。勝っても、負けても学生気質は気持がいい。我々も一週間に亘る歌の合唱練習を存分に発揮して盛大なる拍手を受けた。

学長先生（編集部注・栗本義彦氏）もムードにすっかり酔い上機げん。お得意の、自分で振り付けた「ドンドンパッパ」を踊る。これまた大喝さい。国境もない差別もない、明るい心と心が描きだす美しい情景だった。

▽7月14日　昨日の勝で今朝はすっきり。朝食のボリュームも苦にならない。朝食後、学長先生が、こんな話をされた。『韓国というところは、バスケットボールが盛んで、ハンドボールのプレーも、バスケット的な傾向が見られるしレフエリングも、その感が強いのでデフェンス側は損だね』……。

やはりスポーツ全般について、高い識見をお持ちで、考えることも、見る角度も我々とは異る。

午後、仁川に向う。ソウルと仁川は、東京と横浜のような立地条件で、人口30万の港湾都市。相手は大学選抜とのゲームだがアウトコートなので選手も大張り切り。しかし、第1戦、第2戦のゲーム内容から、安楽な気分ではいられない。なにしろ、技術、戦術面で3年の差があっても体格・体力で、差し引きゼロに等しいのだから……。

ゲーム開始、得意の速攻は出るしサイドを深く使った4・2のダブルポストのシステムも、動きとボールがリズミカルで着々と加点しかし、選抜チームも、得意のスカイプレーと左3人を使った縦横の力とねばりのプレーでポイント、一進一退の好展開。第3戦目で作戦的にシフトデフェンスを布いているのだが、ボールキープ力と、早く強いシュート力に対抗する協力防禦の連携が、うまくいかない。カットイン・ジャンプパスと、兎に角、秀れたジャンプ力を活かした滞空時間の長い相手のプレーはエリア内に飛びこんだあとパスする感じだし、そのうえに空中バランスが良いので、どんな角度から投げ入れられたボールに対しても楽々とさばいてしまう。

昨年、日体も、このフォメーションが成功し、多くの成果を収めたが、ジャンプ力の相違が、プレーの幅と深みになって出るので判っていてもやられてしまう。

これを完全に食い止めることができるのは最終戦になってしまうのではないか。

前半、10対8と2点リード。後半に入り、独特のVY型速攻で圧到し、観衆を魅了する。7分で13－8と5点差、楽勝を思わせたがここから、ホームデシジョンの笛が出て次から次えと警句（注意）される。とうとう斎藤が10分に2分間と15分に5分間、谷藤が顔をつかれての鼻出血でそれぞれ退場と最悪の事態。この穴を埋めての死にもの狂いの攻防だ。一人足りぬハンデも智力と、組織力と、気力を120％発揮すれば勝つことだってある。いや、勝てるのがチームスポーツの勝負の面白さだろう一点差迄に追い込まれたがよく持ちこたえた。ここで谷藤が22分に鼻血を押さえての復帰、斎藤も退

場が解けて一段と盛り上がる。こうなればしめたもの。たたみかけるような迫力のある速攻と組織の機動力を充分発揮する。3・3のセットシステムから塩崎が中央ダイビングシュート、サイドからのプロンジョンシュートと大活躍で水を開けて20―15で快勝。
　大学選抜には、絶対負けられない意地と根性が、悲壮感にまでなってゲームに現われ、それがプレーの迫力と結びつき今迄見られなかったうちの選手の激しいプレーに陶酔した15分間だった。どんなに、いやなことがあっても、どんなに苦しいことゝつらいことがあっても、手しおにかけた選手が勝負に執念を燃やし勝負に全てを注入する純粋性に触れたら一ぺんに吹き飛んでしまう。
　夜、日本食のパーティ。
　全員でサクラサクラ、五ツ木の子守唄などを唱う。
　帰りのバスの中も協会の人達と高らかに歌声を交歓……
▽**7月15日**　あいにくの雨。今回の遠征中ただ一日の休養だっただけにちよっとガッカリ。午前中は観光、午後は日体同窓の歓迎会と買いもの。
▽**7月16日**　第4戦の行われる全州に向かう。車窓から目に映る田園風景はさすが韓国一の米所だ。
　途中、競技委員長の鄭鎮圭さんに誘われ食堂車で杯をかわす。鄭さんは昭和38年に韓国高校選抜軍の役員（審判）として来日している。現役時代、当時の11人制コートでハーフライン（約50m）からのシュートを得意としたというだけあって180cm、100kgの豪傑だ。
　ソウルから約4時間裡里市に着く。ここの人はほとんど円仏教の信者だそうで・日本にもこの宗教が入っているという。
　夜、女子学生による手作りの料理に心が暖まり、食べ終ったあと女子学生と歌の交換。
▽**7月17日**　第4戦・円光大学との対戦。韓国では、国際試合のほとんどが、ソウル中心で行われる為に、全州では、珍らしいそうで観衆もぞくぞく詰めかけ・コートサイドまで鈴鳴りの状態。怪我人が出ぬかと心配する程であった。
　ゲーム開始は12時。ソウルでの試合が全部16時からだったのでコンデショングの点で少々心配、環境に順応して体のリズムを変えるということはすこぶるむずかしいことである。
　ゲームが始まったが、案の定、折角、絶好の速攻チャンスをつかんでもボールコントロールが悪かったり、ダッシュ力がなかったりで生かしきれない。円光大学も練習不足が目立ち、コンビネーションプレーの冴えが見られず。成均館大、慶熙大と似たようなスカイプレーをするが威力もなく得点につながらない。李鍾範（大学選抜選手）のパワーのあるシュート力が頭抜けており、パッサーとしても一流、守りもうまい。一人三役の活躍だ。前半はせり合いのゲーム展開に終始。しかし、後半、超人的な李の脚力投力もさすがに疲れがみえはじめ他の二人、三人も疲労から痙攣で退場、日体も選手の動きそのものはよかったが展開内容がうすく14―9で勝ったものの快心とはいえない。
▽**7月18日**　全慶熙大と第5戦。第2戦で対戦した現役に7人のOBを加えた韓国最強チーム。プレイングコーチの除康錫氏は昭和38年に韓国学生選抜の主力として来日した人だ。
　慶熙大としてはライバルの成均館大が日体から1勝しているだけにどうしても勝ちたいところ。試合前からその気迫が伝はってくる。
　試合開始、出足はいつになく好調だ。先取点は大川―斉藤のジャンピング・クイックプレーによるもの。これはバレーボールのクイックを導入しようと以前から日体大・森田選手（注・日本バレーボール界のトップスパイカー）からそのコツなどを聞いて、狙っていたプレー。まさか韓国遠征で〝成功〟するとは思はず、してやったりと膝を打つ。
　しかし全慶熙大もベテラン・除の好リードで攻めこんでくる。
　ハーフタイムに、除に対するデフエンスを指示、攻撃面ではボールを早くはなし、そのあとの動きを考えるようにうながす。後半2点差をつけられた23分からオールコート（プレス）ディフエンス。塩崎の単身速攻で1点差。時間は3分残る。相手は逃げの態勢だ。あと2分。ボールカット、しかし身体接触がありと判定されあと1分、敵も味方も必死の攻防、ベンチも総立ち、だが、ついにホイッスル。夜、エンバサードホテルで学長先生の誕生祝い。〝勝利〟をプレゼントできなかったのは申訳けない。
▽**7月19日**　いよいよ最終戦。相手は緒戦で苦杯を契した成均館大
　連戦の疲れで体が思うようにならないだろう。馴れない食事で、コンデションが最低の状態だろうしかし同じチームに2度と負けられない。ハンドボールマンの意地と、日本学生界の名誉をかけなければならないのだ。
　自信と不安が交錯する中で、ホイッスルが鳴る。やはり疲労からのミスが多いし、ミーティングで確認し合ったデフェンスの責務も遂行出来ず、ポッと真空地帯が出て、守りにリズムとバランスがとれない。この穴をつかれて早いモーションからシュートを打たれポイントされる。どうも大型選手のもつ技術的欠陥をつく、うまい戦術的プレーにしてやられる。
　又、リードしてもすぐ取り返すねばりには敬服する。このねばりは、食生活から来るものなのか、それとも民族性なのか。
　後半の20分に、一度は、3点差迄にして安全圏に入ったと思はれたのだが、追い上げられ13対12で辛くも勝つ。通算成績は4勝2敗極度の疲労で意志通り動かない最悪の肉体的条件だったがよく気力で、これをカバーして頑張ってくれた。このことは、何よりも得難い体験であり、今後のチーム力向上の大きな礎となるに違いない。
夜、ハンドボール協会のレセプション。
　多くの善意と親切、それに韓国選手の持つ勝負への厳しさとプレーの激しさ……。今回の遠征でわれわれは実に多大な収穫を得た。
　よき友よ、コマスミダ（有難う）。またいつの日にか…。アニヨンケセヨ（さようなら）　（完）

日体大韓国遠征成績

結果	スコア	対戦相手
●	18―19	成均館大
○	15―13	慶熙大
○	20―15	韓国学生選抜
○	14―9	円光大
●	11―12	全慶熙大
○	13―12	成均館大

日韓選手体格比較

	身長（cm）	体重（kg）
日体大	174.8	68.9
成均館大	175.3	71.7
慶熙大	174.9	69.3
大学選抜	175.9	70.3

ハンドボールの歩み（第15回）

デュクラ・プラーグに栄冠

2位はディナモ・ブカレスト

ヨーロッパカップ編 ⑤

男子第5回ヨーロッパ杯選手権大会は1962年から1963年の冬にかけて行なわれた。

この大会から、準々決勝と準決勝だけではあるが、今日のヨーロッパ杯大会の慣例になってきている、ホームアンドゴーアウエイ（自国で一度と相手国で一度試合を行なう二回戦方式、勝ち数、得失差点の順で順位をつける方式）方式が確立された。このように今日のヨーロッパ杯選手権は長い歴史の上にたって、今日の形ができあがっているのであり、一朝一夕に現在の形が生れたのではないことを記憶しておいていただきたいものと考える。

この大会はデュクラ・プラーグとディナモ・ブカレストという、ここ十年近くハンドボール界を牛耳っているルーマニアー、チェコスロバキア両国のトップチーム同士の対戦となり、この両強豪時代のヨーロッパ杯に於ける幕明けとなった。この両チームは前回は強チームと目されておりながら、ディナモ・ブカレストが東ドイツのDHfK・ライプチッヒに一回戦で接戦ながら破れるという番狂せを生じ、そのDHfK・ライプチッヒがデュクラ・プラーグに準々決勝で破れるという結果になっており、その前の回と前の前の回にも対戦をもっており、因縁浅からぬものをもっている。

参加国は22チーム

前回参加の19チームから3チーム増加して、22チームが参加している。

ハンガリーとポルトガルの復活モロッコが欠場し、2ケ国が増え、アイスランドが出場し、前回優勝のFA・ゲッピンゲンがそのまま推薦出場の形をとり、西ドイツからは、古豪THW・キールが出場し、西ドイツは2チームを出場させることになった。筆者の記憶に誤りがなければ、このような処置がとられ、一ケ国から2チームが参加したのは、ヨーロッパ杯の歴史の中でこの回ただ一度のことである。

参加国が22チームと多教にのぼったため、16チームにしぼるための予選6試合が行なわれた。

初出場のアイスランド 緒戦を飾れず

▽予選

THW・キール（西ドイツ） 19－11 WKS・スラスク・ブレスロー（ポーランド）

アトレティコ・マドリッド（スペイン） 13－6 ベンフィカ・リスボン（ポルトガル）

フレマール・ブラッセル（ベルギー） 17－11 HBC・デュデリンゲン（ルクセンブルグ）

スパルタク・ブタペスト（ハンガリー） 25－14 WAT・アッツゲルスドルフ（オーストリア）

グラスホッパーズ・チューリッヒ（スイス） 12－7 オペラティー・55・ディン・ハーグ（オランダ）

スコヴバッケン・アールフス（デンマーク） 28－27 フラム・レイキャヴィイック（アイスランド）

初出場のアイスランドは緒戦を飾れず本大会に出場することはできなかった。アイスランドのフラム・レィキャヴィックがいきなりアールフスというデンマークの強豪とぶつかり、1点差の試合、しかも延長戦の末に惜敗という試合を行ない多くの人々を驚かせた。

ハンガリーのスパルタクス・ブタペストは先日全日本チームがボインツァ杯で顔を合せているハンガリーでもっとも歴史の古い強豪チーム。前回も出場することになっていたのだが、都合で出場できず、今回はその埋め合せの意味もあり、みごとにオーストリアのWAT・アッツゲルスドルフを大破して、本大会に駒を進めた。

強豪順調 勝ち進む

▽一回戦

FA・ゲッピンゲン（推薦・西ドイツ） 40－14 フレマール・ブラッセル

デュクラ・プラーグ（チェコ） 18－12 THW・キール

DHfK・ライプチッヒ（東ドイツ） 25－17 ブルヴェストニク・ティビリシ（ソ連）

ハイム・ゲーテボルグ（スウェーデン） 27－20 アーセナル・ヘルシンキ（フィンランド）

スコヴバッケン・アールフス 10－9 フレデンスボルグ・SB・オスロ（ノルウェー）

ディナモ・ブカレスト（ルーマニア） 24－11 スパルタク・ブタペスト

GRK・ザグレブ（ユーゴー） 26－15 グラスホッパーズ・チューリッヒ

アトレティコ・マドリッド 18－11 UC・パリ（フランス）

ベスト・エイトに残ったのは、西ドイツ、チェコ、東ドイツ、スウェーデン、デンマーク、ルーマニア、ユーゴー、スペインの諸国である。前回は西ドイツ、ユーゴー、フランス、東ドイツ、チェコスウェーデン、デンマーク、スイスであった。前回は何度も触れるがルーマニアが不覚の一敗をきっしているので、やや変ったベストエイトになったが、今回代っているのは僅か2ケ国、前々回にさかのぼると西ドイツ、デンマーク、チェコ、ルーマニア、オランダ、スウェーデン、フランス、ポルトガルという形になっていて、今日的感覚でいうと、やっと4回、5

回大会になって、ヨーロッパ杯も強豪がそれらしい形でベスト・エイトをしめるという確立された形になってきたと云えよう。

準々決勝・準決勝は初の二回戦方式で

▽準々決勝（二回戦方式）

FA・ゲッピンゲン	19－10	アトレティコ・マドリッド
アトレティコ・マドリッド	12－9	FA・ゲッピンゲン

1勝1敗、総得点28－22でFA・ゲッピンゲンの勝利

デュクラ・プラーグ	21－11	DHfK・ライプチッヒ
DHfK・ライプチッヒ	14－9	デュクラ・プラーグ

1勝1敗、総得点30－25でデュクラ・プラーグの勝ち。

ハイム・ゲーテボルグ	19－17	スコヴバッケン・アールフス
スコヴバッケン・アールフス	21－14	ハイム・ゲーテボルグ

1勝1敗、総得点38－33でスコヴバッケン・アールフスが準決勝に進出。

ディナモ・ブカレスト	22－8	GRK・ザグレブ
ディナモ・ブカレスト	9－8	GRK・ザグレブ

ディナモブカレスト2勝

準々決勝はディナモ・ブカレストだけが無敗で通過、他の3チームはいずれも一勝一敗となり、総得失点の差で勝利を握り、準決勝に進出することになった。二回戦方式のスコアは前記の通り、ホームチームの時には、大勝するというのが通例のようになっているがこれはきわめて興味深い現象である。2勝を挙げたとは云え、ホームコートのブカレストでは、22－8と実力差をいかんなく見せつけたディナモ・ブカレストも、相手コートでは、9－8と辛勝におわっている。

このことは、相手チームのコートにのりこんで勝つことがいかに至難の技であるかを示している。観衆、コート、宿泊等々といった環境が非常に大きく試合を左右する要素として浮びあがってきている。これは何もこの時だけでなく、クラブチーム同士の国際試合ナショナルチーム同士の試合、あるいは国内チーム同士のリーグ戦などに於いても同様の現象がしばしば見られる。

このようなことから、第三国で試合を行なったり、ホームアンドゴーアウエイ方式が採用されなければならない事態が生ずることになるのである。

日本の観衆と違い、ヨーロッパの観衆の自国びいき、自分の町のチームびいきは著名な話で、これまで渡欧した選手団もしばしばこのことでは苦労したという話を聞いている。

いささか話がそれたが、準々決勝は予想された通りの結果となりそれぞれ強豪が勝ち進み、西欧圏2東欧圏2のチームがベスト・フォアに決定した。

欧2ケ国が栄冠を争う

▽準決勝

デュクラ・プラーグ	9－7	FA・ゲッピンゲン
デュクラ・プラーグ	24－14	FA・ゲッピンゲン

デュクラ・プラーグ2勝

ディナモ・ブカレスト	14－12	スコヴバッケン・アールフス
ディナモ・ブカレスト	14－10	スコヴバッケン・アールフス

ディナモ・ブカレスト2勝

準決勝はデュクラとディナモがあっさり、2勝をあげた。FA・ゲッピンゲンは準決勝でデュクラ・プラーグに敗れ、三連覇の望みは消えた。この年のデュクラ・プラーグ、ディナモ・ブカレスト両チームの成長ぶりには眼をみはるものがあり、翌1964年の世界選手権の両国の対決が大きな期待をもって待たれるようになった。

デュクラ延長戦の末 ディナモを破る

決勝　1963年4月6日於パリ

デュクラ・プラーグ	15－13	ディナモ・ブカレスト

決勝戦は男子ヨーロッパ杯の主管国になっているフランスのパリで行なわれた。

この試合期待通り、大激戦となり、試合がおわった時には、13－13と全く同点。その後延長に入ってから、デュクラ・プラーグは2点をあげ、守っては、ディナモ・ブカレストに1点も許さず、第1回大会のプラーグ市チームに続いて、2回目の栄冠をチェコにもたらした。

世界選手権ではすでに1961年の第4回世界選手権でルーマニアーチェコ時代に入っているが、ヨーロッパ杯もこの大会を契機として、ルーマニアーチェコ時代に入る。もっとも、クラブ対抗のため、種々のハプニングがあり、栄冠は東ドイツ西ドイツなどの間に行ったり来たりがあるが、チェコとルーマニアが常に中心になって動いていくことになっていく。

(注) FA・ゲッピンゲンは従来FA・ギョッピンゲンとしていたものですが、ゲッピンゲンのほうが原音に近いので今回から変更します。（藤本強）

全日本男子遠征報告(2)

～ヨーロッパの2ケ月～

ユーゴチームのハンドボール

近森克彦
（FP・大崎電気工業）

今回、はじめてユーゴのハンドボールに接することが出来、来年の世界選手権への日本にとっては前しよう戦ともゆうべき貴重な試合をし、且つ、ユーゴのハンドボールを観ることが出来ました。

誠に貧弱な記憶ですが思い当るまま書いてみたいと思います。

過去に於いて、ユーゴスラビアの存在は、世界的にも大したもではありませんでしたし、我々も又、白紙の状態だったのですがルーマニア、ハンガリーで、一部の関係者の来年の世界選手権はユーゴが優勝するだろうとの噂を聞くにつけ、驚くとともに、実際どの程度か、興味をひきました。

ユーゴは、ここ数年来、研究に研究を重ね長足の進歩をとげ、今各国で話題の的である1：2：3という防禦システムを生み出しました。このシステムによって昨冬から今春にかけてユーゴが世界の強豪を相手に全勝したというのですからいかに画期的なものであるか、理解出来ると思います。

その新しい1：2：3のシステムですが、強豪と言われる国には強力なロングシューターがあり、その防禦方法としてソ連などはマンツーマン方式をとっていますがこの1：2：3のシステムは、常にボールを持った選手に対してシュート出来ない様、セットデフエンスで防禦するもので、これでは当然ロングシュートは難しい訳です。又、攻撃に移る際、この方式ですと、速攻が素早く出来ることも特徴のようです。ユーゴの得点の多くが速攻でのものであることが裏付けています。ただどの方式にも長短はあるようにユーゴの用いてるシステムは、ダブルポストに対し、セット、デフェンスが崩れること、又、非常に多くの体力を必要とすることです。（もっとも後者の方は、ナショナル選手ともなれば、その程度の体力はもちあわせているでしょうが）

では攻撃についてはどうかというと、私の見た今回のユーゴチームは、日本チームと対戦した以外は、来年のこともあり、作戦の手の内を見せてくれなかった如く思われました。ただ、個々に取りあげてみると他国の選手より、強い握力でボールを完全に自分のものとしていること、左の長身ロングシューターがいること、チームのけん引者たる老巧なゲームメーカーがいることなどです。

全体的にみてユーゴチームの特徴はデフェンスと、そこから繰り広げる速攻に尽きると思われます

日本はタシマイダン杯で、ユーゴを少差ではあるが堂々と破った訳ですが、敗れた後、ユーゴのトレーナーは、『今後の計画は全面変更、新しくやり直す』と、本気とも冗談ともつかぬことを言っていましたが、日本の目的はユーゴを破ることで、ユーゴの特徴である速攻を、『速攻のチームは速攻にもろい』のたとえ通り、逆に日本も速攻でゆく作戦を用い選手各自も綿密な計画のもとでユーゴを考え直し、頑張ることが必要であると思います。なにはともあれ、来年の選手権を控えて、ユーゴと試合が出来、身近に観ることが出来たことは、大いに役立ちましたがユーゴが今回の敗戦によって、一大奮起してくることは充分に予想され全日本には今回以上の気力が要求されましょう。

ソビエトチームのハンドボール

近藤信行
（FP・大崎電気工業）

〝ヨーロッパのハンドボール〟と一口に言うと、ヨーロッパの国々は同じようなプレーをしている様に感じるのだが、それぞれ異なった特徴があり国々で違う。

ドイツ、スウェーデンにみられる流動的なプレー、ルーマニア・チェコにみられる体力とスピードで押し切るプレー等に対し、ソ連のハンドボールは日本のプレーに似通っている点が多い。

そのプレーは身長一七〇センチ前後のヨーロッパでも指折りのドリブルの名手・ソロムコとロングヒッター・クリモフ等が中心になり左サイド動作とブロックプレーを折り混ぜて無理のない攻撃を示す。破壊力に欠けるが、それを練習量でカバーしている様だ。

全員よく走り、防禦から攻撃に移る時少しでも相手のスキがあれば全員が一斉に飛び出し、小さなスキをも、ものにする。意気の合った攻めの速さは、まるで、相手を折りたたむようで、これがソ連チームの最大の得点源になっている。

ディフェンスに於てはキーパーの好守が目を引き、シューターがいざボールを投げようと思う瞬間そのシューターに対しおおい被るように前に出たり、又、サイドシュートに対しては、能ざと股下を広く開けておき、シューターが股下に投げ入れるように誘い込み投げた瞬間に股下のボールはもう押えられている。

この様に、〝かけ引き〟とか〝間合いの取り方〟とかいうもののうまさは抜群である。

私生活に於ては、タシマイダン杯大会中、ソ連チームと同じ宿舎で生活していたのだが、グランドだけではなく、何事においても、ソツなく、落ち着いているし、我々が試合時間等の変更や何かでモタモタしている事が多いのに、むこうは余裕のあるかの如く行動している。

全員の行動が何もかも、サッと

揃い学ぶ姿は、誠に、〝立派〟であるというに他ならない。やはり彼等は、このような生活に慣れているのだろう。直接ゲームには関係のない事かも知れないが、日本チームも学ばなければならない点ではないかと思う。【左の写真はユーゴ(白)と対戦するソビエト。】

11人制の国際試合を見て

井上素行
(FP・大崎電気工業)

西ドイツのオッヘンバッハにあるスタジアムで11人制ハンドボールを観る機会に恵まれた。西ドイツ対スイスの国際試合だが、シーズン終りのゲームにもかかわらず約一万五千の大観衆がつめかけていた。シーズン中なら満員の二万五千は確実に入るだろうとの事だった。前座ゲームのジュニアの試合が終った後のセレモニーで来賓紹介、テレビの実況中継もやるとの事で多くの有名人が来ていた日本にもおなじみのペライ氏、トルカ氏等の紹介もあった。我々日本チームも紹介され、われる様な拍手と大歓声により歓迎の意を示してくれた事は感激だった。

試合は非常に懐しいものだった。美しい芝のコートにセンターサークルがあり、35mラインがあり、ゴール前には13m半円のゴールエリアラインが引かれている。コートを見ているだけでも楽しくなる様な雰囲気だった。

しかし初めて見ると云う若い連中等はこの古典的?ハンドボールが多分奇妙なものとしか映らなかっただろうと思う。

ゲームの結果は24―12のダブルスコアで西ドイツの楽勝であった。世界の名プレイヤーと呼ばれるルブキングを中心に豪快に走る西ドイツのフォワードを見ているとハンドボールのダイゴ味が十分味わえられる。7人制の一番面白い部分であるところの中間速攻が常にゴール前で展開されている感じである。流れが大きいだけに7人制のように緊張感がないが豪快さにおいては7人制では味えないものがある。しかもシュートに対するキーパーの動きはダイナミックなうえにも美しい。この様な魅力を捨て切れず今も11人制ハンドボールを続けている西ドイツのハンドボール関係者の気持が理解出来るような気持になった。

スタンドも実になごやかなムードだ。心からハンドボールを楽しんでいる。売店にはこのゲームの為に作られたペナント、記念バッチヤジ用のラッパ、笛、その他ハンドボールに関する多くのものが販売されていた。さすがハンドボール王国だなと再認識させられた11人制ハンドボール観戦の一日だった。

ルーマニア球界の実態

本田洋
(GK・日本体育大学)

共産国・ルーマニアでの三十五日間に体験したハンドボールが欧州ハンドボールの全べてではないけれど、共産国の多い欧州各国に共通するものがあります。

一、施設についてどのようであるか。多種競技種目をもったスポーツクラブが千五百余数あり、その中でも五つの有名なスポーツクラブが全国各地のスポーツクラブを統制していた。テストをうけて合格すれば所属出来るのである。娯楽の少ないこの国ではスポーツが青年達の唯一の楽しみであり、また夢でもあります。スポーツクラブの経営は国から2ケ月四〇〇～六〇〇万円の資金援助があり、トレーナーや選手達がそれで生活しているのです。強いチームになれば援助金も増すという。また国外への遠征に行くこともあり、スポーツ選手になることは特権階級の生活を営めるのです。共産国のプロ化された強さを感じざるを得ない程に施設はすばらしいものでした。

二、練習に於ける指導方法、内容はどのようであるか。方法、内容の全国統一化されたハンドボールを強調し、全国から集ったトレーナーの講習会を開き、研究発表会を行っている。各地方で育てられた選手を臨時集合させゲームを行ってもプレー展開、攻撃システム防禦システムが理解出来、チームワークが揃うことが出来るのである。ルーマニアの統一化された姿にも、共産国故の強さを感じる。日本のハンドボール界も、統一化の中にある良さを考えるべきであると感じた。

三、選手の体力、テクニックはどうであったか。防禦においての動きが激しく、攻撃以上の厳しさがある。防禦第一のハンドボールである。日本の防禦は人形のように、やさしく立っている。常に有利な防禦の位置に移動している防

禦方法を学ぶ必要がある。また、マン・ツー・マンで守ることが出来るだけの防禦力を持つ必要があることを教えられた。基礎体力の練習は防禦の激しい動きの出来るためのものでありまた攻撃の多種のシステムを繰り返し繰り返し、リズム、テンポの正確さを追求してゆく。練習過程の中でも基礎体力を身につけてゆくと云う方法で、あえて基礎体力のための練習と云うものはなかった。彼らの体力面で有利な点は長身であり、ボールを片手で握って操作するのが習慣になっていて腕力があるという点である。日本人は彼らよりも腕力、握力背筋力は少ないが、身のこなしが上手である。日本独自の力を発揮するには、長身のシューター、スピードあるシュートに対応出来る激しい動きのある防禦力と、スピードのある速攻ではないだろうかと考えます。【写真は西ドイツ対日本戦。ヨーロッパのナショナルプレィヤーの腕力・握力はすごい】

タシマイダン杯大会（前半戦）

飯田誠行
（FP・大崎電気工業）

ザヴィドヴィチにおける我々日本人に対する人々の感情は我々が思っていた以上に暖かいもので歓迎して呉れた。

汽車を降りた時のあの観衆の異常な興味深さを持ったまなざしは遠い異国から「よくいらつしやいました」と云っているようであった。

大会に入っても日本チームの試合ぶりは地元の人たちの注目を集めたようだ。

〝アジア〟〝東洋〟というものに対する関心ということもいえるだろう。我々がコートに出ると大きな拍手。ハンドボールの本場・ヨーロッパにおける著名大会はいつもこうしたムードで開かれるのだろうか。うらやましいと思う。

初日の対ソ連戦に際しては徹底的に日本に声援して呉れた。それにはかなり政治的な雰囲気が感じられた。現在、世界情勢でのソ連と日本の立ち場というか何かをまざまざと見せられた。だが観客の声援に反して私達の試合は惨敗に終った。試合の後で何か間の抜けた疲れを感じたが、ヨーロッパにおける有数の選手権大会に出場して初戦に敗れたという感覚がピンと来なかった。だがその翌日の対ユーゴスラビア戦においては昨日と同じように同情にも似た声援をおくつて呉れていたが前半の終りがけには、日本がリードして観客が自分の国であるユーゴの声援をレフェリーの笛がする時などは聞きとれない場面が続出、ゼスチャー、でその場の雰囲気を感じとっておりました。

そして試合後半の終盤近くに7mスローがユーゴに与えられゴールキーパー、下里が劇的に阻止したユーゴの敗北が決定した瞬間にはこの世の人の声かと思われるようなあきらめにも似たどよめき声というより音を感じた。我々はこれで「勝てる」と云う思いが頭の中をよぎり、試合終了のホイッスルがなった時は前日のあの物足りない気の抜けた様なものではまるでなく、世界選手権に優勝でもしたような気分になり、目がしらに熱いものが流れて、からだをだき合い背をたたき合ってよろこび、からだがほてりつ放しでまぶたがポーッとする。あのような事は私のハンドボールの歴史でも初めての経験でありました。

この一勝のためのルーマニアにおける35日間の合宿、試合、それ以前の東京代々木のスポーツセンターなどで全員が其礎練習などに汗を流した事が、価値あるものとなった。その反面敗れたユーゴ・スラビアチームは奈落のどんぞこにでも落ちたごとく沈んだ表情がかくせ切れなかった。

今大会の優勝候補の筆頭にあがっていたチームだけに落胆も深いようだった。

そしてこの試合終了後先きに訪問したルーマニアチームのトレーナー、選手。ハンガリーのトレーナー、選手達が共に喜こんでくれた事はスポーツを通じての人間のふれ合いを感じさせて呉れた感激的なできごとだった。

翌日の対ルーマニア戦においては反省の材料を我々に残してこの地ザヴィドヴィチでの3戦を終了しました。

この地を去る時、駅に我々を見送りに多くのファンが来てくれた又いつの日か会える事を夢みて思い出多いザヴィドヴィッチを後にする。

ポーポー……ポー。汽車の警笛は、さびしくもなつかしい思い出としていつまでもひびいているようだった。

タシマイダン杯大会（後半戦）

下里敏彦
（GK・大崎電気工業）

思い出多かったザビドビッチにくらべ、ユーゴスラビアの首都であるベオグラードにおいてのタシマイダン杯の物足りなさは、やはり観客の動員数によるものか？。それと、ソ連がユーゴと引き分け優勝を確実なものとしたためか。全くもりあがりのないものとなった。

今大会第4日は我々日本チームは対戦相手なく試合の見学に専念した。ソ連対ハンガリー、ユーゴ対ルーマニア、両ゲームとも一方的な試合となった。

しかし、その時みせたソ連のソロムコ選手の、カットしてこぼれた球がほどんど、地面についているものを、ドリブルしてスピードを落とさず走り速攻に移って得点した時は思わず拍手を打っていた見たこともない〝超美技〟であった。

翌日は我々の最終戦。ハンガリーとは2戦して1勝1敗であり又この試合に勝てば3位、敗れれば最下位となる。何が何んでも勝たねばと、試合前のミーテング練習には、全員がハッスルしてチームのムードをもり上げ試合にのぞむ。結果は引き分けに終り、日本、ハンガリーとも同率3位に終る。

今度いつの日にか、対戦する時には、この決着はかならずつけると、心に誓いタシマイダン杯の全日程を終えユーゴーとも別れをつげた。

ユーゴー国の感想

藤中憲二
（FP・日本体育大学）

二ケ月の遠征の中でユーゴスラビアで生活したのはタシマイダン杯の開催地ザビドビッチと首都ベオグラードで七日間。この遠征の目的とも言われるタシマイダン杯を競った生活としては厳しく息を抜く日もなかった。ザビドビッチではこの大会の為に宿舎や競技場（ハンドボール専用）が新設された。この町は人口五万人と小さな町だがハンドボールに対する市民の情熱は大変なもので試合の時は常に五千人以上という熱狂ぶり。特に日本に対する声援はものすごいものがあった。宿舎ではソ連、ルーマニア、ハンガリー、ユーゴの選手達と一緒で生活した訳だが宿舎の廻りには子供達が朝からとりまきサインやバッヂをねだる。人々は人なつこく親切であった。

ユーゴは他の共産国に比べて町の雰囲気や生活は民主化していた。特に男性で目立ったは、今流行のヒッピー。ハンガリー、ルーマニアには見られぬ髪の長い若者や服装が目立った。女性もパンタロンを着ている。日常生活を見ても野菜、くだもの、電気製品が豊富だ。タシマイダンを競ったザビドビッチは市民の生活は低く自由資本が入ったとはいえまだまだ日本に比べる比較にならない。ベオグラードは首都だけあって近代的な建築が立ちならび交通量も多くヨーロッパの他の共産国に比べえこれから飛躍する国だと思った。

ルーマニアの感想（生活面）

平岡秀雄
（FP・大崎電気工業）

私は日本を出発する前ルーマニアに対して……というより共産国ということばに対して何か陰湿なものを頭に描いていました。しかしルーマニアの首都ブカレストに着き、私が実際に見・感じたものは、透き通るような青空、近代的な建物そして美しく整備され、緑にあふれた並木道でした。それは私達が経験するスモッグに薄汚れた大都会・東京に見る色彩でなく自然色に満ちた美しい町でした。このような町を歩くカラフルなミニスカートの女性を見るとき、私は好気心とともになぜか近代化というか自由化の波を感じずにはいられませんでした。

私達はブカレストを拠点にして練習や試合に1ケ月間を過したのですが、練習が1日2回だったので、練習に明け、練習に暮れる厳しい毎日でした。しかし、そうだったからこそ夕食後2時間程の自由時間は私達にとってより一層待ちどおしい時間でした。

着いた当初、自由時間に喉をうるおすべく出かけたのですが、言葉が通じなかったり、店が満員だったりで、空しく帰ったこともありました。だから感じの良い店を見つけてきたときには重大発見をしてきたかのごとく各部屋へ伝えて廻ったものです。しかし1週間も過ぎた頃には友達もでき、より快適な毎日を送れるようになりました。

私達はルーマニア滞在中、ガラチ・スナゴフ・ティミショアラー・ブラショフその他各地を転戦するたびに、自由時間・レセプションのときを問わず乏しい英語力にゼスチュアーと度胸でもって多くの思い出と友達を得ることができましたが、特にガラチでは大学の女子寮の一角を借りて宿泊したことや、試合後しセプションで相手チームの人達と肩を組んでビールを飲み交わしたことなど、忘れられない思い出となりました。またブラショフでは、外人の床屋はろまくないというので、床屋に行かない私達を見かねた勝コーチが、野花の咲き乱れる草原で雄大な山々をバックにクシとハサミを握っておられた姿は今なお印象に残っています。

私達がこのようになごやかな楽しい雰囲気の生活をおくることにより、2ケ月間という長期遠征中いがみ合いもなく、またルーマニア最終戦では、ナショナルBチームに2戦全勝し、その後も一応満足のできる戦績を得る原動力になったものと信じます。そして技術面だけでなく、生活面においても多くを経験し、学ぶことができたことを幸いに思っています。

西ドイツでの民宿

東　一敏
（FP・大崎電気工業）

大役のタシマイダン杯も終了、この遠征唯一の自由国訪門で7月3日、西独へ。

フランクフルト空港からは、有名なオート・バンを、毎時百キロのスピードで行く。車窓からは、色とりどりの看板が眼に染む。「やはり、西独だ」なんて、騒いでいたのも束の間、涼しさで皆んなコックリ、々々。

西独第一戦の地ハスロフに到着日本語での挨拶を受けたり、食事をしながら、雑談していたが、監督から、「ここは、民宿だそうだ」と聞いた時我々はびつくり、選手一人に一軒と聞いた時はさらにビックリ。これまでの、疲れもおいしかった食事の味もわすれてしまった。

島国根性の我々が、まして、外国人の家族と共に一緒に数日を過ごす事は大変だと思ったからである、パパの出向えで、一人々里子に取られて行く様子は監督・コーチには、面白かったろうが、こちらは、真険である。

西独の我家？は、肉屋と、レストランを経営する親子四人の家族であった。（長女11才、長男7才）

一夜あければ、練習会場に、三々五々集まっては我家？の自慢話である。

〃私の家〃は前記のごとく、肉屋と、レストランのせいか、食べろ々々としつこい。オヤジさんが太っているので、僕の身体をみていつそう食べろろとすすめる。「そんなに、太つたら、ハンドボールが出来ない」と云うと笑っていた。

日本人は箸を使だろう、箸を使えといわれたけれど、準備してくれたものは箸とは、名だけ、串ぬきの串二本。使ってみせたあと、オヤジさんがまねると、手に、軽いケイレンをおこして、やはり、ナイフとフォークに替えてしまった。夜は、TVをみたり、日本地図を開いて、九州、熊本、家族、東京、小生、仕事とか単語だけで日本の話を通じさせた。休暇は、給料はとか色々話する。土曜日の夜、明日は水泳に行くとかで、子供二人が海水着になって、泳ぐ似ねをしたりしているのをみると子供の時を、思いだしたりしたが、日本子供に対する躾の厳しさは、日本より数段上のようで、某国の教育ママにも、一度西独へ行かせたいものである。

子供達もよく躾を聞く。身体を動かすことやスポーツすることを真けんに考えていた、三泊四日の民宿は〃すべて度胸一つだ〃と、教訓をあたえてくれたし一生の想い出となるたろう。別れる時、全員でのホタルの光や、途中まで、追いかけて来た、チビちやん達の顔が思い出される今日この頃だ。

西ドイツの印象

中　井　武　三
（FP・同志社大）

最後の遠征国ドイツには7月2日に入国しました。ドイツに入ってまず感じた事は、車の多い事、そして、この多い車に応じて道路のよく整備されている事、とくにアウトバーンは、りつぱで石、その他のゴミ類が全々おちていなかった。アウトバーンの速度は無制限である。しかしドライバーは、町の中に入ったなら、制限速度を守り、交通道徳を、しつかり守っていた。

どこの町へ行っても、道にゴミがおちていないし、おとす人も見なかった。町の中には緑や、花が多く町全体が明るく、美しかった。ベルリンに行った時、私たちが行く一週間前に、〃東西の壁〃に一人の男が挑戦して失敗したとの事でした。このベルリンの壁を、真のあたりに見ましたが、感じのよいものではありませんでした。早くこのような壁がなくなるようにと祈るだけでした。せめてスポーツの世界だけでも〃国境〃のない交流をつづけたいものです。これを除けば、短かいドイツではありましたが、民宿にも泊れましたし、他の国にもまして印衆深い国でした。

どこの国も、食事は肉が主体でこの肉が、おいしくなく、日本の食料の豊かなのを痛切に感じました。外国に行き日本のよさがわかりました。

初の海外遠征を終えて

野　田　　清
（FP・大同製鋼）

私は、海外遠征は初めてで、生来23年間というもの日本食から離れたことがなく、欧州での食事や水質の違いには苦しめられた。

しかし、日がたつにつれ除々にペースを取り戻していった。

この目で共産国を見たのも当然初めてでルーマニアの公共料金、食料品などの日用必需品が安いのが目についたが反面、贅沢品は高くその差が著しかった。

しかし町々は美しく花園などの手入れがゆき届き、花は咲き乱れ緑がたいへん美しく、スポーツ施設も実によく完備されうらやましい限りであった。

6月19日よりハンガリー入りをしたのであるがブタペストの中心にはドナウ河が流れ周囲には古い建物や教会などがたちならびとても美しい。

6月25日はバスにゆられて国境を越え、タシマイダン杯出場のためユーゴへはいった。ユーゴもルーマニア、ハンガリーと同様共産国でありながらアメリカナイズされ一種独特のムードを持った国であった。

この三国の共通点は国家がスポーツ振興のためにばく大な援助をしているということであって、このことは、来年世界選手権での日本が勝利を納める前に大きくたちはだかるであろう。

7月3日、最後の訪問国である西ドイツへ到着。ラインハウゼン

では協会のはからいで久しぶりに民宿をして、家庭の味を満喫することができた。西ドイツは日本と同様戦後の復活ぶりが目ざましく国全体が活気に満ちあふれていた。しかし、第二次大戦後、ドイツを二分した東西の壁が冷たく横たわっており今尚心に残っている。プレー面においては、この遠征に参加した私自身の最大の目標であった「私自身のプレーがどこまで通用するか又、通用させることができるか」であったが、この問題はタイミングのとらえ方と、走りを利用することによって何とかできるという自信を持つことができた

やはり外人を相手に勝利をおさめるためには、そつのない攻撃をすることと日本人の特徴である速攻を生かすことである。しかし速攻のみにとらわれるのでなくその中に遅攻をうまく織り込んでゆかねばならないと思った。なぜなら敵ボールになったら一点取られることをかくごせねばならないからである。常に言われていることであるが前者を完全に行うためにはチーム・ワーク、すなわちコンビネーションであるとつくづく感じた。

ディフェンス面においては初戦のころはロングを防ごうと前へツめればポストからシュートを打たれるといった悪循環があったが、この両者を防ぐにはネデフ氏も言っていたようにディフェンスのパワーをつけることとフットワークを完全なものにする以外道はないと思う。

やはり来年世界選手権へ行って勝利を納めるのには日本チームの特徴をさらに磨きをかけ完全なものにして臨まなければならないと痛感した。

西ドイツ週刊誌における選手団の印象

近着の西ドイツの週刊ハンドボール誌「ハンドボールヴオッヘ」では、今回の日本選手団の遠征を大きくとりあげ、多くの頁をさいて、関連記事を掲載している。

この中で、真夏にも抱らず、7人制の試合を室内で行ないしかも多くの観衆を集めたこと、日本チームが〝強い〟という形容詞をつけられていることが特に印象的である。

西ドイツのトレーナーの言としては、「シーズン中ではないため7人制に不慣れであり、前半は非常に苦しい試合になり、ようやく慣れた後半、なんとかできた。とにかく速い上に日本は力もつけてきた」とある。

西ドイツにとって日本の訪独は今年の夏シーズンの大きな話題となったことは確実である。

国際選手権で初の優勝

ボインツア杯大会回顧

村田　弘
（全日本男子監督）

6月6日より3日間ブカレストのボインツア競技場で日本・ボインツア・ブカレスト、トラクトール・ブラショフ（いづれもルーマニア）スパルターク・ブタペスト（ハンガリー）の4チームが参加して行なわれた。

この大会は毎年ルーマニアの労働者が主催し、招待して行う競技会である。（ボインツアとは労働者のクラブ組織で全国の20都市に組織を持っている。）

本年のルーマニアは六月初旬というのに雨が多くこの三日間も天候が不順で、あと二日間は豪雨に見舞われ、初日はグランド、二日目が雨中戦、そして最終日は体育館とさんざんな日程だった。

われわれは強化合宿三週間を過したあとだけに、その成果を発揮する最もよいチャンスであった。

他の3チームのうちボインツアはルーマニアのBリーグで優勝し来シーズンからAリーグ入りを決定して非常に意気が上っていた。

スパルタークはハンガリーの名門。同国Aリーグで数回の優勝を誇りヨーロッパカップにも出場している。今シーズンは3位でナショナル選手が三名入っていた。ルーマニアのあとハンガリーに遠征するので、ハンガリーのハンドボールを知る最もよいチャンスであった。

第3戦の相手トラクトールは実力的に少し低かった。

総体的にみて日本の総合力が優位をしめるとの予想であった。

初戦の相手ボインツアとはルーマニアに遠征してきて一週間目に対戦し16―16の引き分けに終っているだけに両チームファイト満々で戦かったが日本は終盤速攻と7MTを決めて勝利を得た。

第二戦スパルタークはヨーロッパ屈指のクラブチームとの対戦であり、日本の実力を問うに一つの機会であったのだが連日の雨で、グランドコンディションが悪くその上試合開始直前から豪雨に見舞われ試合のできる状態ではなく、3―5と国際試合にしては全く珍しい得点に両チーム終はった。ハンドボールらしさを失ってしまった凡戦で若し体育館でやっていたら互いに実力を発揮しわれわれも充分勝つ自信もあっただけに非常に残念であった。

第三戦は雨のため36×22の体育館で実施。体力、テクニックに勝る日本の勝利で2勝1敗となった。この結果、ボインツア対スパルタークの対戦によっては日本の優勝も考えられることとなって観戦しながら何度か喜んだり、心配したりしたものだ。結局ボインツアが勝ち総得点でかろうじて日本の優勝が決定した。出場チームが少なかったので内容的に盛り上りは乏しかったが日本のチームが海外で優勝したのは初めてのことであり大変に有意義であった。そしてその後のスケジュールにも大いに張りが出たと確信した。

なお、優勝チームに与えられる賞杯―『ボインツアカップ』はガラス製のみごとなものであったが、勝者の持ち廻りという伝統的な品でもあり帰国まで携帯したり、返送する時に破損などしてはと思い持ち帰っては来なかった。

連載・ヨーロッパの技術研究(4)

青少年ハンドボール選手のトレーニングにおける医学的な問題点

M・クセラ, M・マセク

ハンドボール競技の今日の隆盛は我々の身体組織のトレーニングに関して強い管理を必要とするようになっている。

特に私達のように青少年を扱っている医者にとって、このことは非常に重要なことである。

というのは、チェコでは、11～15才の少年が学校で八千人、16～18才の年令では、六千人がハンドボール競技を行なっている。

これら青少年の数はけっして少なくなく、これに責任をもって当ることは非常に重要な要素となっている。

これだけでなく、ハンドボールの普及はめざましく、それぞれの地区の学校、高校、町はもとより村々にまで、広く競技は行なわれている。

問題は次に述べる二つに主にしぼられるものと思う。

一、ハンドボール競技を幼時から専門的に行なう、もしくはよりよいと思われるのは、青少年のスポーツ能力を高めること。

二、身体組織におけるトレーニングの作用

第一点については、すでに長い間、医者その他が注意を向けている。

このように小さい時から、スポーツをやることは、そのことによって、健康をそこねたり、その後の運動能力の発展を妨げたり、また正しい目的意識のもとに行なわれなかったりというようなことがあっては、全く無意味なことになってしまうので、そのようなことが絶対にないように注意しなければならない。

これらに関しては、極端な意見が述べられている。

その一つは、十分に体作りがなされていない段階では、決して一つのスポーツを専門にやってはいけないと云うものであり、他は初めから、どんどんやったほうが望ましいとするものである。

少年と青年のトレーニング、云いかえるならば思春期の前後のトレーニングに差を設けるかどうかに関しては未だよく解決されてはいない。

ここに少年期のトレーニングの重要な問題が存在している。

それでは、どのような要素をもったトレーニングをまず行なったらよいのであろうか。

1958年に次のようなことを念頭に置いてはと考えられた。

一、少年の機敏、機能、体力を総合的に発展させることのできるスポーツであること。

二、個々人の身心両面の発展をはかれるものであること。

三、地域的な条件（気候、用具など）にあっているものであること

スポーツ的能力をたかめるための少年から青年の移行期はつまるところ基礎体力という点から見ても、ほぼ同様な移行の時期にあたる。

この移行期はすこぶる重要である。トレーニングをこの間、なくすことは考えられない。

種々の観点から見て、ハンドボールはすべての基礎的な運動能力を要求している。すなわち、走、跳、投といった要素を兼ね備えており、もつともてきしたスポーツということが云えよう。

多くのハンドボールのトレーナーは11才の時にトレーニングを始める。これはハンドボールが基礎的な体力養成にも、また競技自身のトレーニングにも適しているという特性をもつているからであるが、この期間はごく楽なことを行なう。12才～13才になってからが適当であるという意見もあるが、大勢は11才が良いと考えている。私達もハンドボールを始めるのにもっとも適した年令は満11才がよいと信じている。もつとも成長の遅速によつてこれは若干変つてくるが原則的には、11才が適当である。

第二の点は、この時期では、長時間のトレーニングはむしろ有害であるとされている。そして、合目的的な練習でないならばむしろマイナスで、変な指導を受けた場合には、もう一度やりなおさなければならない場合が生じる。

年令が少なければあきやすく、高年令になればかなりの熱中度を示す。これは私達が調査した統計資料の中にも現われている。したがつて、トレーニングは年令に応じて別々に組んだほうがよりよいように思える。

第三の問題は健康管理の問題である。これはトレーニングをいかに管理、運営していくかの問題である。

もちろん、年令によって、少年あるいは青年またはその移行期によって、トレーニングの種類・時間を変えることは考えられよう。しかしこれは非常に難しい。いかに健康を害さずに、人間の能力を高めていくか、の問題になる。

青年の場合には、基本的に云つて、激しいトレーニングの後に、休みの時間を設け、これを適宜に組み合せ、調子を高めていくことが望ましいとされている。少年の場合には、これは無理で、現在まで多くの人々が語つているが真に理想的なものは決められていないのである。

青年にこのようなトレーニングを行なつた場合、呼吸数、脈膊などもきわめて順調に整えることができる。また呼吸器系統の機能を高めることも可能である。

少年の場合には、ハンドボール体操、水泳と云った総合的なトレーニングが必要である。

少年の場合の実験によると、短時間に強い負荷をかけたほうが長時間に弱い負荷をかけるより、健康上有利であることが判っているそこで、もし少年同士の試合が行なわれるなら、そこでは、次々に選手をとりかえ、短時間に爆発的なプレーをさせ、ベンチにかえつて休ませるという形の試合方法をとることが推められる。

少年のトレーニングに関しては私達はさして経験がなく、現在種々の方法、時間などについて、検討中であり、多くを語れないのは残念であるが、種々のことが考慮されている。

ハンドボールの選手を観察する際には、ゴールキーパーとその他のフィールドプレーヤーは、しつかりわけて行なわなければならないのは言うまでもないことであろう。

通則にしたがえば、他のチームゲーム、たとえば、サッカー、バレーボールなどに一般的に要求されるトレーニングを行なうことで十分であろう。

しかし、私達は、彼等の手の関節について十分に注意を払わなければならない。このことはとかく軽視されがちであるが、重要な問題である。

また、少なくとも、三週間の休暇をとることをすすめる。

秋のシーズンが終了したならば本当の意味で完全な休養をとることが望まれる。これはとかく行なわれないことが多いのであるがぜひ毎年完全な形で実行してほしい

少年、青年のトレーニングは私達の経験が少なく、特にハンドボールでは、その普及の歴史が浅いため、一般的にも、調査研究が遅れており、未解決の事項が山積している。

しかしながら、次代をになうハンドボール選手の健康の面、スポーツ能力の発展の面から見てももっと、もっと多くの事項が研究されなければならない。

近い将来、必ず解決をしなければならない問題である。

最後に青少年の体力作りに関しての医学的に管理について述べ、まとめにしよう。

まず、私達は少年に正式の服装をさせるように強く要求しなければならない。

特にゴールキーパーについてはこのことは強く要求されてしかるべきであろう。現今のキーパーの99パーセントまでは不十分な服装をしている。

少なくとも、すねあて、手袋、トレーニングパンツ、サポーターを着用させるようにしなければならない。ハンドボールは比較的歴史の浅いスポーツであり、そのため、私たちは十分な経験をもちあわせていない。

そのため、どのような点を十分に医学的に管理しなければならないかは疑問が多い。少年の年令によって、試合の場で体験する組織の疲労がどの程度のものなのかをはっきりと云うことは現段階では不可能と考えられる。

私達の体験から考えて、すすめることのできるのは次のようなところである。

一、少年の体力作りと、トレーニングは少年の年令が満11才になった時にはじめることが望ましい。

二、個々の少年がトレーニングを開始する際には、十二分な注意をもって、年令相応の位置にまでひきあげていくこと。

三、少年のトレーニングの継続時間は注意深く、注意深く調整していくこと。

また、少年期に適するように、身体面でも、精神面でも、十分に配慮して、ルールその他の面も変更するならば、ハンドボールは広く一般の少年に愛好され、その身心を鍛えるためにもつとも適したスポーツの一種と云うことが云えよう。

×　×　×

すべてに十分に注意されたトレーニング計画、11才といろと小学校の5・6年、ここからトレーニングをはじめると云うのですからチェコの強さが判るような気がします。

（抄訳　藤本強）

長崎国体展望

伯仲の高校男女

第24回国民体育大会ハンドボール競技は10月26日から31日までの6日間、長崎市営球技場に全国各地の予選を勝ち抜いた5部門73チームが参加して開かれる。組み合せの抽せんは9月27日東京で行われたが各部門の有力チームを探ってみよう。（編集部）

※

【一般男子・30チーム】シードされた大崎電気（埼玉）、三景（東京）、住友化学菊本（愛媛）、常盤工業（岐阜）が優勝候補のトップクラス。ナショナルプレイヤーをずらりと揃えた大崎電気は今年勝てば9連勝になる。全日本総合（8月・盛岡）ではチームとしてのまとまりを欠き2位に終り、関東予選でも三景に押しまくられてやっと勝つなど選手の質量が額面どおりに活かされていない。この大会では是非立ち直ったところを見せて欲しいものだ。対抗は三景。関東予選での接戦で大崎には自信を持った。しかし、全愛知、常盤工業らの強敵が立ちふさがっており楽観は許されぬ。住友化学菊本も打倒大崎の念に燃えているがAOK栃木、熊本ク、奈良クらクラブ界の実力チームが並んでおり油断は禁物である。ダークホースは全神奈川―氷見ク（富山）の勝者、全佐世保（長崎）、日新製鋼呉（広島）あたりか。注目のワクナガ薬品（大阪）がメンバー編成の不手際で大阪代表となり乍ら近畿予選を棄権、姿を見せぬのは惜しい。

【一般女子・12チーム】いわゆる4強のうち大洋デパート（熊本）と三菱鉛筆（神奈川）の両者が大崎電気（埼玉）、田村紡（三重）に今年は水をあけており、大洋―三菱の争はとみるのが順当。

昨年以来、出場した大会にすべて優勝という大洋デパートの自信にあふれた堅陣に対して、関東地区で宿願のトップに躍り出た三菱鉛筆が初の全国タイトルを掌中にできるか。その試合ぶりはみものである。ダークホースは全長崎、全岩手。大阪スターズ―全福井戦も面白くなりそうだ。ブラザー工業（愛知）が大洋デパートに捨て身で当るともつれるのだが……。

【高校男子・10チーム】全日本高校優勝・下関中央工（山口）のダブルクラウン成るかが焦点。有力チームがひしめくブロックだけに荒れそうだ。

Bブロックも予選の難しい顔ぶれが並んだ。

全日本高校で話題をさらった富岡・桐生工混成の全群馬が抜け出てくるとみたいが、新居浜工の斗志も侮れぬし、岐阜も選抜とは思えぬまとまりのよさを誇っている。

地元の期待を集めている長崎は計画的な強化が実を結んでいるようで、調子の波をつかめば一気に優勝をさらう公算もある。

1回戦、2回戦のうち4試合は単独校対選抜軍。精鋭揃いだけに予断を許さず、地域予選で前年優

一般男子

大崎電気（埼玉）
マツダ・ク（青森）
大分ク（大分）
函館工OB（北海道）
神戸製鋼（兵庫）
全神奈川（神奈川）
氷見ク（富山）

AOK栃木（栃木）
福島SGク（福島）
日新製鋼呉（広島）
熊本ク（熊本）
本田技研（三重）
奈良ク（奈良）
県工ク（石川）
住友化学菊本（愛媛）

常盤工業（岐阜）
甘農ク（群馬）
東北学院大OB（宮城）
全京都（京都）
高知ク（高知）
北農ク（長野）
全佐世保（長崎）
ウルフス（滋賀）

小倉工OB（福岡）
全愛知（愛知）
塩山ク（山梨）
徳山ク（山口）
盛岡商友会（岩手）
丸善石油（和歌山）
三景（東京）

一般女子

大洋デパート（熊本）
ブラザー工業（愛知）
全北海道
全長崎
井原高OG（岡山）
大崎電気（埼玉）

田村紡（三重）
大阪スターズ（大阪）
全福井
高知ク（高知）
全岩手
三菱鉛筆（神奈川）

高校男子

下関中央工（山口）
湯沢（秋田）
大阪選抜
鶴崎工（大分）
全北海道

氷見（富山）
長崎選抜
岐阜選抜
新居浜工（愛媛）
全群馬

教員

大阪イーグルス
岐阜教員
香川教員
福岡教員ク
福井教員
沖縄教員

北海道教員団
長崎県教員
岩手教員ク
山口県教員団
埼玉教員ク

高校女子

新居浜市商（愛媛）
全北海道
広島選抜
全秋田
熊本選抜

島原農（長崎）
全大阪
全愛知
小松市立（石川）
栃木選抜

勝の全静岡や全日本高校2位の中大附（東京）が破れるといった波乱のムードがそのまま今大会にも持ちこまれるだろう。

【高校女子・10チーム】 全日本高校での戦いぶりからすれば新居浜市商（愛媛）が有力だが、2回戦（緒戦）からまったく気が抜けない。

このサイドの勝者から優勝が出るのはまちがいないのではなかろうか。

一方のサイドは全日本高校準優勝の栃木女を中心とした栃木選抜中心の展開となろうが、何れも実力は紙一重。

順当に行けば新居浜市＝全北海道―広島選抜の勝者が優勝最短距離だ。

【教員・11チーム】 全日本教員（8月・上尾）優勝の東京教員クがメンバー編成の都合で欠場。絶対の〝力〟をもつチームがなく混戦模様である。

大阪イーグルスもいちぢほどの鋭さがなく、埼玉教員は持ち駒に不安がある。

そのスキを福井、岩手、長崎あたりがつくようだと面白いわけでその斗志を期待したい。

なお、沖縄が初参加する。

【総合優勝争い】 5部門に出場の地元・長崎が強化も予定どおり進んでいるようで有利とみたい。

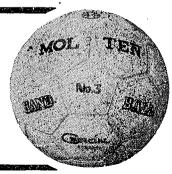
あとは埼玉、神奈川、愛媛、熊本らが有力で特に埼玉は一般男女教員で大量点が望め長崎の強敵となろう。北海道もフルエントリーだが今年は苦しそうだ。

全日本学生の組合せ

男子第12回・女子第5回全日本学生選手権（11月26日～30日）の組み合せ抽せんは9月24日東京で行われ別表のように決まった。会場は駒沢屋内球技場と駒沢体育館。全日程を室内で進めるが、これは初めてのこと。なお男子の3回戦と準々決勝は同一日（第3日）に行われる予定。女子の決勝リーグも最終日一日で消化される。

男子トーナメント（参加45校）

日体大
愛知教大
九州産大
追手門学院
富山大
国士館大
名古屋大
明星大
北海道大
京都大
法政大
早稲田大
甲南大
防衛大
仙台大
桃山学院
関西大
武蔵工大
金沢美工大
順天堂大
南山大
東京教大

立教大
本州大
京都産大
明治学院
名城大
同志社大
大阪経大
慶応大
金沢工大
中央大
東京学芸大
東北学院
中京大
明治大
関西学院
山梨大
西南学院
日本大
大阪体大
岐阜大
金沢大
東北大
芝浦工大

女子予選リーグ組み合せ（参加9校）

▼A組、日体大、中京女大、日女体大

▼B組、中京大、大阪体大、東京教大

▼C組、東女体大、甲子園大、東京学芸大

（注）決勝リーグ試合順序は予選リーグ終了後に改めて抽せんで決められる予定。

国体地域予選決勝記録

▽……北海道

函館工ＯＢ（一般男子）、室蘭ク（同女子）、室蘭選抜（高校男子）、室蘭選抜（高校男子）、北海道教員団（教員）が各代表に決定

＝試合記録は前号既報

▽……東北

▼一般男子第1～第3代表決定戦

東北学院大ＯＢ（宮城） 20―15 マツダ・ク（青森）

ＳＧク（福島） 20―18 カスカワ・ク（山形）

盛岡商友会（岩手） 31―17 大曲ク（秋田）

▽同第4代表決定リーグ

カスカワ・ク 14―12 大曲ク

マツダ・ク 15―12 大曲ク

マッダ・ク 14（分）14 カスカワ・ク

【順位】①マツダクラブ②カスカワク③大曲ク

▼同女子決勝

全岩手 14―5 全涌谷（宮城）

▼高校男子決勝

湯沢（秋田） 14―13 全山形

▼同女子決勝

全秋田 16―3 全福島

▼教員決勝

岩手教員 16―3 宮城教員

▽……関東

▼一般男子第1代表

大崎電気（埼玉）を推せん

▽同第2～第4代表決定戦

全神奈川 20—11 AOK栃木（栃木）
塩山ク（山梨） 26—22 甘農ク（群馬）
三景（東京） 32—15 日本原研（茨城）

▽同第5、第6代表決定リーグ

AOK栃木 28—15 日本原研
AOK栃木 26—13 甘農ク
甘農ク 18—16 日本原研

【順位】①AOK栃木②甘農ク③日本原子力研究所

▼同女子第1、第2代表決定戦

大崎電気（埼玉） 12—5 東京重機（東京）
三菱鉛筆（神奈川） 25—3 栃木女ク（栃木）

▼高校男子決勝

全群馬 18—15 中央大附属（東京）

▼同女子決勝

栃木選抜 8—6 埼玉選抜

▼教員決勝

埼玉教員 26—5 茨城教員

▽……北信越

▼一般男子第1、第2代表決定戦

氷見ク（富山） 28—12 柏崎工OB（新潟）
県工ク（石川） 21—11 北農ク（長野）

▽同第3代表決定戦

北農ク 20—18 柏崎工OB

▼同女子決勝

全福井 11—7 富山選抜

▼高校男子決勝

氷見（富山） 10—9 羽水（福井）

▼同女子決勝

小松市女（石川） 11—5 高岡女（富山）

▼教員決勝

福井 30—21 富山

▽……東海

▼一般男子第1、第2代表決定戦

全愛知 18—17 常盤工業（岐阜）
本田技研（三重） 12—11 清商ク（静岡）

▽同第3代表決定戦

常盤工業 26—7 清商ク

▼一般女子

リーグ戦の結果、田村紡（三重）、ブラザー工業（愛知）が代表に決定＝試合記録は本誌31頁東海選手権女子の項参照

▼高校男子決勝

岐阜選抜 16—8 全静岡

▼同女子決勝

全愛知 8—6 全静岡

▼教員決勝

岐阜教員 18—11 静岡教員

▽……近畿

▼一般男子

大阪代表の棄権により奈良ク（奈良）、ウルフス（滋賀）、丸善石油（和歌山）、全京都（京都）神戸製鋼（丘庫）が予選試合を行はず推せんされた。

▽参考記録（2試合）

奈良ク 24—7 ウルフス
全京都 31—8 神戸製鋼

▼同女子決勝

大阪スターズ（大阪） 11—5 甲子園ク（兵庫）

▼高校男子決勝

大阪選抜 11—5 伏見工（大阪）

▼同女子決勝

大阪選抜 6—2 兵庫選抜

▼教員決勝

大阪イーグルス（大阪） 39—10 和歌山教員ク

▽……中国

▼一般男子代表決定戦

徳山ク（山口） 28—21 全倉敷（岡山）
日新製鋼呉（広島） 21—11 境港市役所（鳥取）

▼同女子決勝

井原高OG（岡山）が山松会（広島）を13—10、徳山ク（山口）を13—7で破り代表に決定

▼高校男子決勝

下関中央工（山口） 16—7 全広島選抜（広島）

▼同女子決勝

広島選抜 6—5 岡山選抜

▼教員決勝

山口教員団 19—15 岡山教員団

▽……四国

▼一般男子決勝リーグ

住化菊本（愛媛） 27—8 高知ク（高知）
住化菊本 30—17 高松ク（香川）
高知ク 17—12 高松ク

【順位】①住友化学菊本②高知ク③高松ク

▼同女子

高知ク（高知）を推せん

▼高校男子決勝

新居浜工（愛媛） 24—6 高松工芸（香川）

▼同女子決勝

新居浜市商（愛媛） 13—6 全徳島

▼教員決勝

香川教員 26—13 愛媛教員

▽……九州

▼一般男子代表決勝リーグ

熊本ク（熊本） 12（分）12 大分ク（大分）
小倉工OB（福岡） 25—15 海上自衛隊鹿屋（鹿児島）
小倉工OB 16—15 熊本ク
大分ク 19—12 海上自衛隊
熊本ク 19—11 海上自衛隊
大分ク 18—11 小倉工OB

【順位】①大分ク②小倉工OB③熊本ク④海上自衛隊鹿屋基地

▼同女子決勝

大洋デパート（熊本）を推せん

▼高校男子決勝

鶴崎工（大分） 14—9 福岡選抜

▼同女子決勝

熊本選抜 15—6 大分東（大分）

▼教員決勝

福岡教員ク 17—15 大分教員

三菱鉛筆が初優勝 関東女子

各地の記録

東北学院大OBが7連勝

第22回東北選手権は9月12日から15日までの4日間、仙台市の宮城県スポーツセンターで行はれた。

男子は、予選トーナメント3試合の勝者3チームによる。決勝リーグで優勝が争はれた結果、地元・東北学院大OB（宮城）が盛岡商友会（岩手）、SGク（福島）を制してタイトルを獲得した。東北学院大OBは7連勝（TGク時代通算）。

女子はトーナメントの末、全岩手が全涌谷（宮城）に快勝、去年につづいて優勝をとげた。

▽男子予選トーナント

東北学院大OB（宮城） 20（10—9 10—6）15 マツダ・ク（青森）
SGク（福島） 20（11—7 9—11）18 カスカワク（福島）

盛岡商友会（岩手）31（13－9，18－8）17 大曲ク（秋田）
▽同決勝リーグ
盛岡商友会 16（7－6，9－9）15 SGク
東北学院大OB 27（13－3，14－3）6 SGク
東北学院大OB 15（9－6，6－7）13 盛岡商友会
【順位】①東北学院大OB②盛岡商友会③SGクラブ
▽女子トーナメント1回戦（＝準決勝）
全岩手 9（5－2，4－1）3 東北宗形製作所（福島）
全涌谷 10（4－3，6－5）8 全和洋（秋田）
▽同決勝
全岩手 14（7－0，7－5）5 全涌谷

大崎電気、三景に辛勝

第16回関東選手権は8月29日から31日まで横浜文化体育館を中心に関東8県の代表（千葉は男子棄権）で争はれた。

男子はナショナルプレイヤーを揃えた大崎電気（埼玉）が、単独チームとしての立ちなおりをいぜん見せることができず、決勝では三景（東京）の絶好調の攻守の前に押しまくられたが、タイムアップ寸前逆転のシュートを決め辛くも面目を保ち10連勝した。

女子は三菱鉛筆（神奈川）－大崎電気（埼玉）の決勝で前半互角のあと、三菱は後半ミドル攻撃を実らせ快勝、宿願の初優勝を飾り大崎の7連勝を阻んだ。

この大会で神奈川代表の優勝は男女を通じて初めてである。

▽男子1回戦（3試合）
全神奈川 20（10－4，10－7）11 AOK栃木（栃木）
塩山ク（山梨）26（9－8，8－9，1－1，2－2，3－1，3－1）22 甘楽農ク（群馬）
三景（東京）32（15－7，17－8）15 日本原研（茨城）
▽同準決勝
大崎電気（埼玉）31（14－0，17－5）7 塩山ク
三景 28（13－7，15－6）13 全神奈川
▽同決勝
大崎電気 21（8－13，13－7）20 三景
▽女子準々決勝（＝1回戦）
大崎電気（埼玉）32（14－0，18－0）0 梨窓ク（山梨）
東京重機（東京）27（11－5，16－4）9 前橋ピジョンズ（群馬）
栃女ク（栃木）28（14－0，14－1）1 佐原女子ク（千葉）
三菱鉛筆（神奈川）24（12－0，12－3）3 全茨城（茨城）
▽同準決勝
大崎電気 12（4－3，8－2）5 東京重機
三菱鉛筆 25（11－1，14－2）3 栃女ク
▽同決勝
三菱鉛筆 8（3－3，5－0）3 大崎電気

全愛知、実業団勢制す
女子は田村紡が連勝

第21回東海選手権は9月13、14日の両日静岡県清水商高グランドに男女ともトップクラス各チームを集めて行われた。

男子は実力伯仲同士で好試合の連続となったが、緒戦で2連勝を狙う常盤工業（岐阜）を降した全愛知が決勝でも本田技研（三重）の反撃をかわして快勝、5年ぶり2度目の優勝を飾った。

愛知代表の優勝は2年ぶり17度目のこと。

女子はリーグ戦で行はれカムバックをめざす田村紡（三重）が順当に勝ち星を重ねて2年連続5度目の優勝となった。

接戦を予想されたブラザー工業（愛知）－大洋紡（岐阜）はブラザーの攻守に一日の長がみられた。

▽男子トーナメント1回戦（＝準決勝）
全愛知 18（8－8，10－9）17 常盤工業（岐阜）
本田技研（三重）12（－，－）11 清商ク（静岡）
▽同3位決定戦
常盤工業 26－7 清商ク
▽同決勝
全愛知 21（14－7，7－8）15 本田技研
▽女子リーグ
田村紡（三重）16－11 ブラザー工業（愛知）
大洋紡（岐阜）17－4 全静岡
田村紡 22－4 全静岡
ブラザー工業 14－7 大洋紡

湯沢、全山形を制す
第22回 東北高校

国体東北予選を兼ねて9月13日から仙台市で6県の代表が集まり行われた。

男子は初優勝を狙う湯沢（秋田）－全山形の決勝となり、延長にもつれこむ熱戦から湯沢が劇的な逆転勝ちを飾った。

女子は県選抜チームがベストフォアのうち三つを占め、全秋田と全福島が勝ち残り、全秋田が前半から圧倒的に強味を示し初優勝。

秋田代表の優勝は3年ぶり5度目。なお、これで今年のブロック高校選手権はすべて終了した。

▽男子1回戦
全岩手 19（6－5，13－2）7 鰺ケ沢（青森）
古川工（宮城）15（8－7，5－6……0－1，2－0）14 全福島
▽同準決勝
全山形 9（3－5，6－3）8 全岩手
湯沢（秋田）13（4－4，9－4）8 古川工
▽同決勝
湯沢 14（7－8，5－4……0－1，2－0）13 全山形
▽女子1回戦
全秋田 9（6－1，3－4）5 宮城二女（宮城）
竹田女（山形）11（2－3，9－2）5 青森西（青森）
▽同準決勝
全秋田 12（5－0，7－1）1 全岩手
全福島 11（5－2，6－4）6 竹田女
▽同決勝
全秋田 16（7－1，9－2）3 全福島

―昭和44年度ブロック高校選手権優勝校―

	男子	女子
▽北海道	函館東	室蘭商
▽東北	湯沢	全秋田
▽関東	明星	昭和学院
▽東海	清水商	名女商
▽北信越	小杉	小松市女
▽近畿	枚方・添上	大谷
▽中国	下関中央工	真備
▽四国	新居浜工	新居浜市商
▽九州	鶴崎工	九州女学院

田村紡24—9大洋紡
ブラザー工14—1全静岡
【順位】①田村紡3戦全勝②ブラザー工業2勝1敗③大洋紡④全静岡

堺工、枚方破り優勝

▼第24回大阪高校総体ハンドボール（8月・大阪府大）

▽男子準々決勝
堺工18—11城東工
北陽17—7上宮
佐野工8—7池田
枚方15—9三国ヶ丘
▽同準決勝
堺工17—9北陽
枚方13—1佐野工
▽同決勝
堺工15（7—4、8—9）13枚方

▽女子準々決勝
大谷19—1梅花
住吉学園21—1池田
鶴見商5—3北淀
春日丘9—3八尾
▽同準決勝
大谷7—1住吉学園
春日丘7—2鶴見商
▽同決勝
大谷6（4—1、2—1）2春日丘

矢掛と真備勝つ

▼第24回岡山県高校選手権（8月井原高）

▽男子準々決勝
津山商7—4天城
倉敷商11—9倉敷工
矢掛17—7邑久
津山工18—4操山
▽同準決勝
倉敷商12—8津山商
矢掛13—10津山工
▽同決勝
矢掛16（8—5、8—5）10倉敷商

▽女子準々決勝
真備12—4井原
西大寺14—3操山
金川7—6青陵
津山商6—0落合
▽同準決勝
真備21—1西大寺
津山商7—2金川
▽同決勝
真備19（14—1、5—4）5津山商

中学大会記録

▼第23回愛知県中学大会（8月・一宮市）

▽男子準決勝
笹島16—6桜田
菊井12—8一宮南部
▽同決勝
笹島18（13—3、5—6）9菊井

▽女子準決勝
蒲郡14—8刈谷南
桜田11—7一宮北部
▽同決勝
蒲郡10（6—1、4—6）7桜田

（注）予選参加校数、男子63、女子43。

▼兵庫県中学大会（8月・明石）

▽男子準決勝
望海13—11筒井台
布引11—9湊
▽同決勝
布引15（4—4、6—6、3—0、2—0）10望海

▽女子準決勝
筒井台10—9湊
苅藻10—2夢野
▽同決勝
苅藻20（8—1、12—0）1筒井台

【お願い】今月号から中学記録を掲載することにしました。当分の間、県大会の準々決勝以上の記録に限りますがふるって御寄稿下さい。

岐阜で社会人リーグ

岐阜県下の社会人チーム関係者によってかねてから構想がねられていた「岐阜社会人ハンドボールリーグ」の発足が本決りとなり、主管者・岐阜社会人連盟（新設）からその日程などが発表された。

それによるとリーグ戦は参加13チームを2部に分け岐阜市民センターを会場に9月1日から10月29日までの12日間（ウィークデー夜）にわたって行はれる。

参加チームは1部が常盤工業、日本耐酸壜工業の両実業団をはじめ、かがり火ク、加納ク、岐山ク、岐阜ク、ファンシー・クの7チーム。2部が鏡島イーグルス、岐阜北高ク、全岐阜南ク、長森ク、東ク、本荘クの6チーム。

なお会長に山内清次氏（常盤工業社長）、副会長に服部正氏、事務局長に高島卓美氏が決まった。

田島実行委員の話 学窓を去ったかっての選手たちにもう一度ハンドボールへ足を向けさせたい。学校ハンドボールの強化一辺倒からはなれて〝皆で楽しむ〟ことを連盟のモットーとするつもりだ。そのため、出場人員を制限せず運営も岐阜協の手をわずらわせないで独自に処理したいと思う。

経費は各チーム五千円を負担する。なお来年からは女子のリーグ戦も実現する予定だ。

・編・集・後・記・

□……日本協会の再編成が行われた。今春以来の〝合議スタッフ制〟が廃され〝理事長制〟が復活した、ところ書けば波風は立つまいが、関係者はこの時期になぜ機構の改正を行はねばならなくなったかを反省すべきだと思う。

□……本誌は創刊以来球界の健全な発展を願いつづけて来たと自負している。卒直のところ、本誌の期待にそむいて日本協会の活動はここ数年低調である。

本誌をささえている全国のチーム・プレイヤーの努力と情熱の高まりに比し日本協会は一部のパートを除いてまったく前進を遂げていないといったら暴言になろうか

□……地方協会関係者にも問題はある。例えば日本協会の発するアンケートなどの回答率のなんと悪いことか。最近の〝全日本アンケート〟では150通の発信に対して返信は僅か57通。

全日本総合、国体などのブロック予選結果も全地域からきちんと揃えられたことがない。今回の刷新を機に斯界から「無責任・無定見」の二語を追放したいものだ。

□……杉山編集委員が理事として日本協会入りする。藤本・杉山と協会側2名による本誌の編集は好ましくあるまい。近い時期に若い人材を加えたいと考えている。

精かんなきみから
精かんな かれへ**贈りものはジャガー**

胸から出す、ノックする、書く………
三菱ボールペン《ジャガー》は、すべてに
スキがありません。
スマートなデザイン、軽快なキャップ
スライド、ムラのない書き味《ジャガー》
は、行動的な若いあなたに、ぴったりです

精悍なヤツ――

ジャガー

三菱ボールペン

¥2000・¥1000・¥800・¥500

日本ハンドボール協会編『ハンドボール』第六十九号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可 昭和四十四年九月二十五日印刷 昭和四十四年十月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南町二五
電話 大代表(467)三一一一
振替 東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価百五十円(年間購読11回・千二百円)